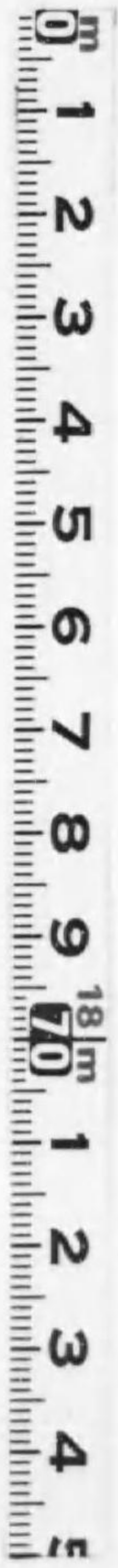


関東大震災
(被害写真、被害統計)
村島亮著
国立国会図書館

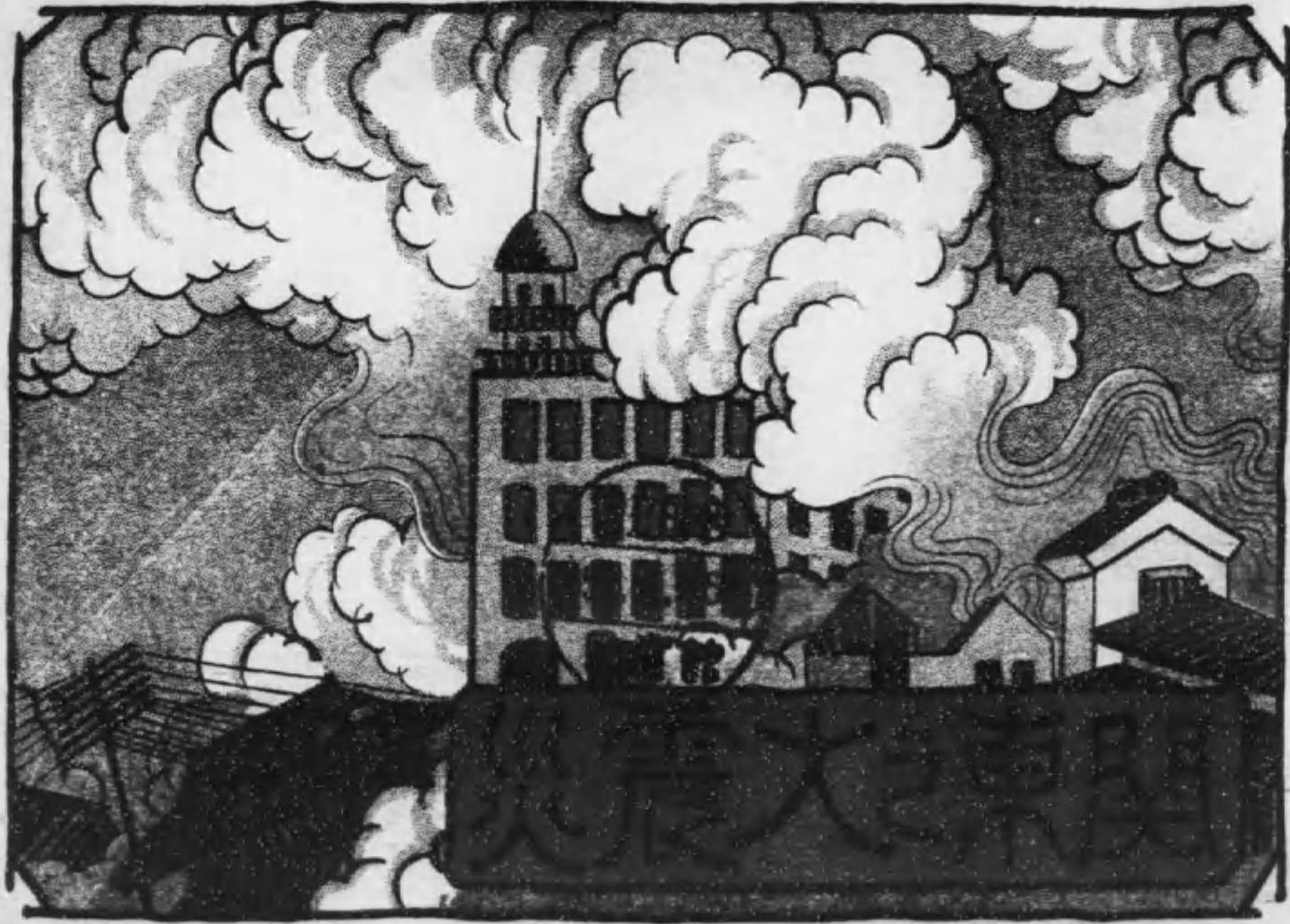
特118

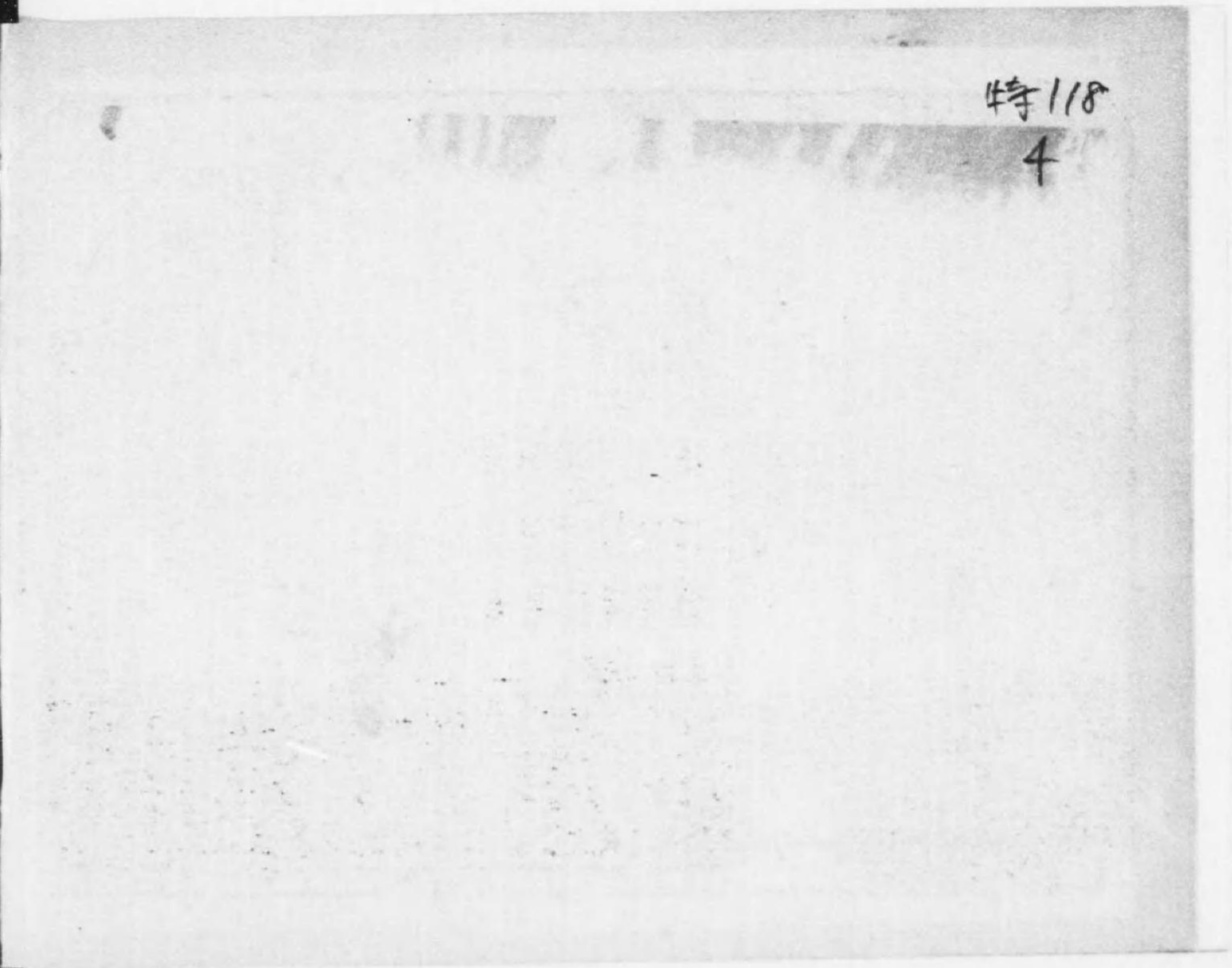
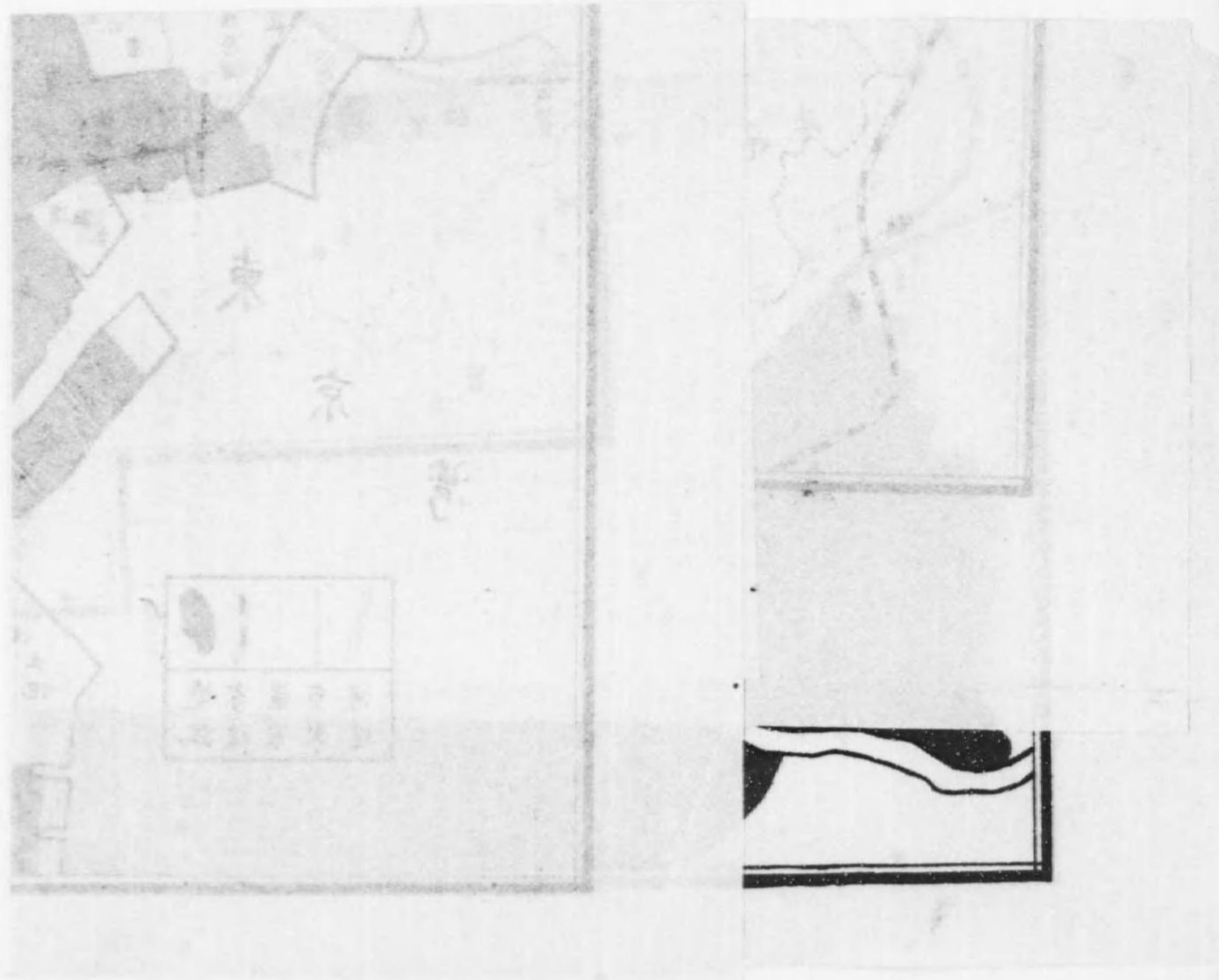
4



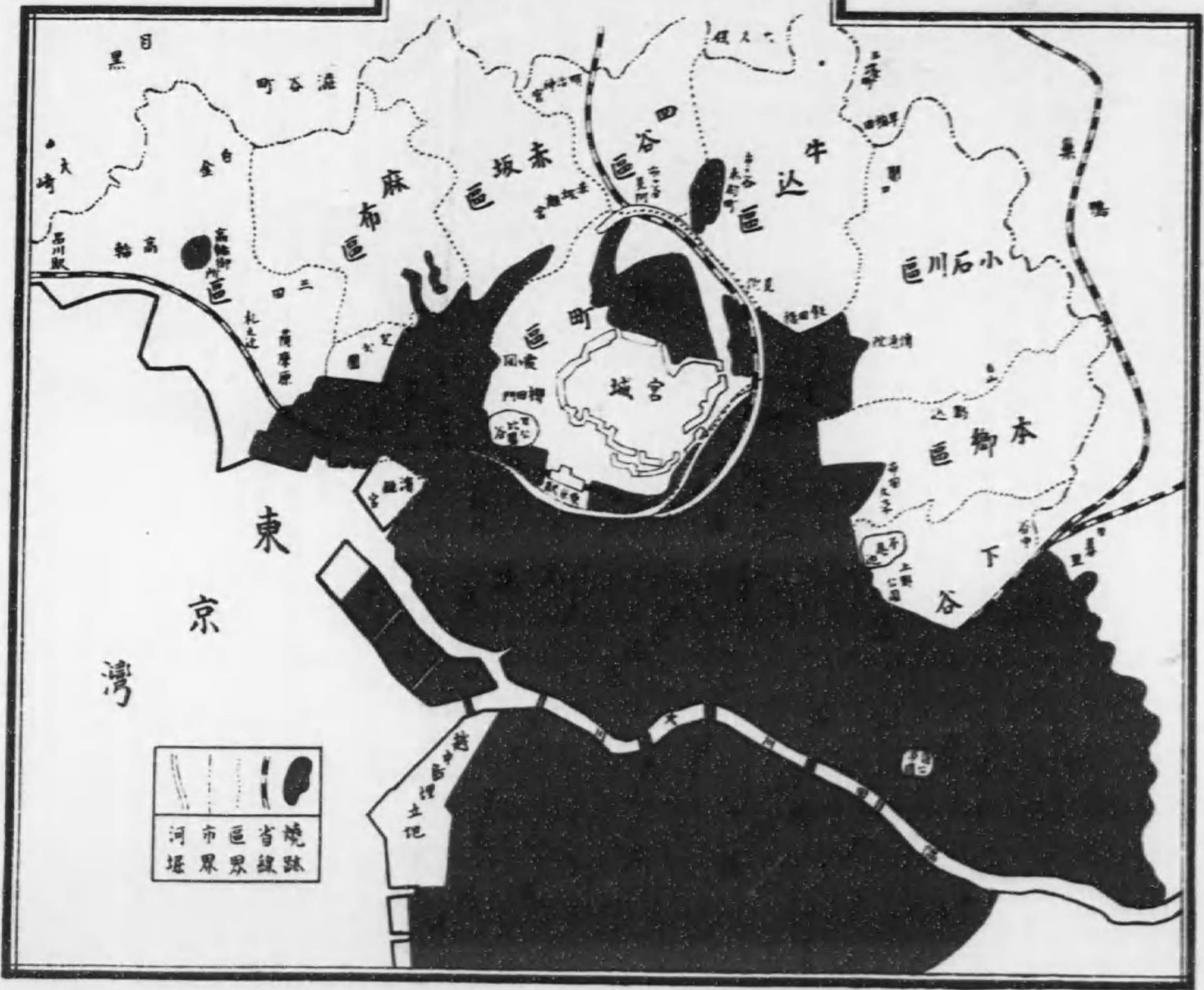
始

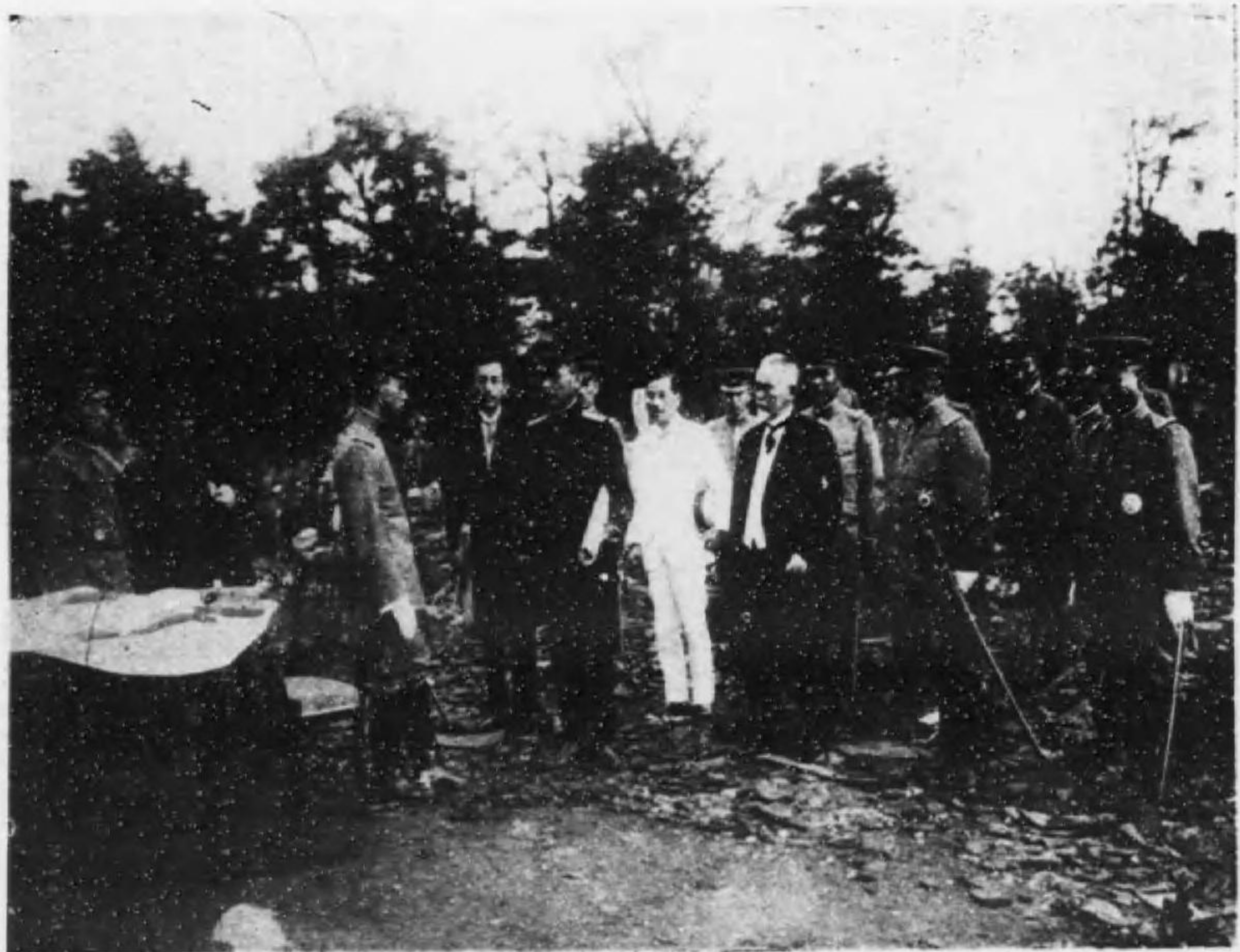






帝都燒失區域



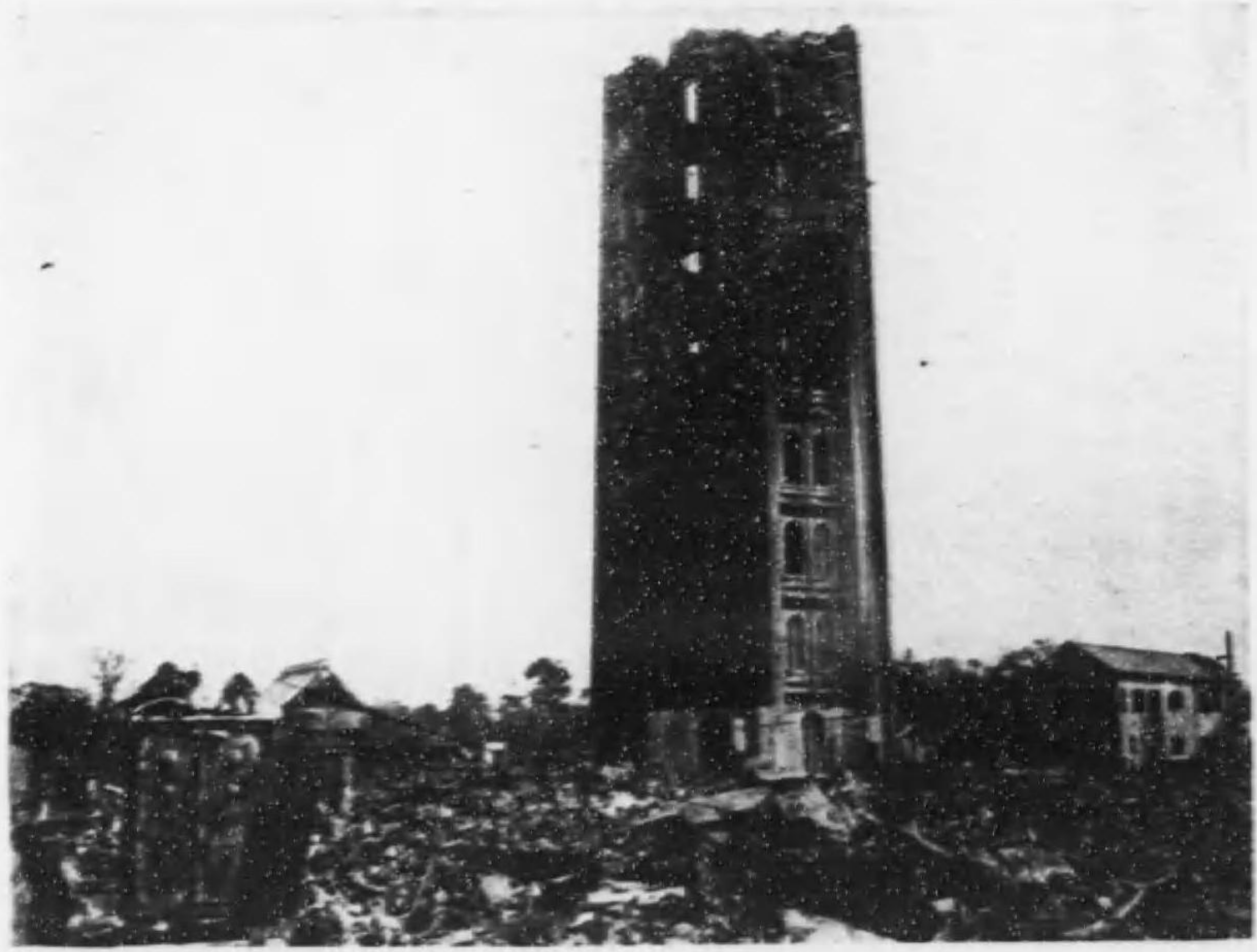


九月十五日震災地御視察の

攝政宮殿下

上野公園にて後藤内相より説明を聞きし召さる



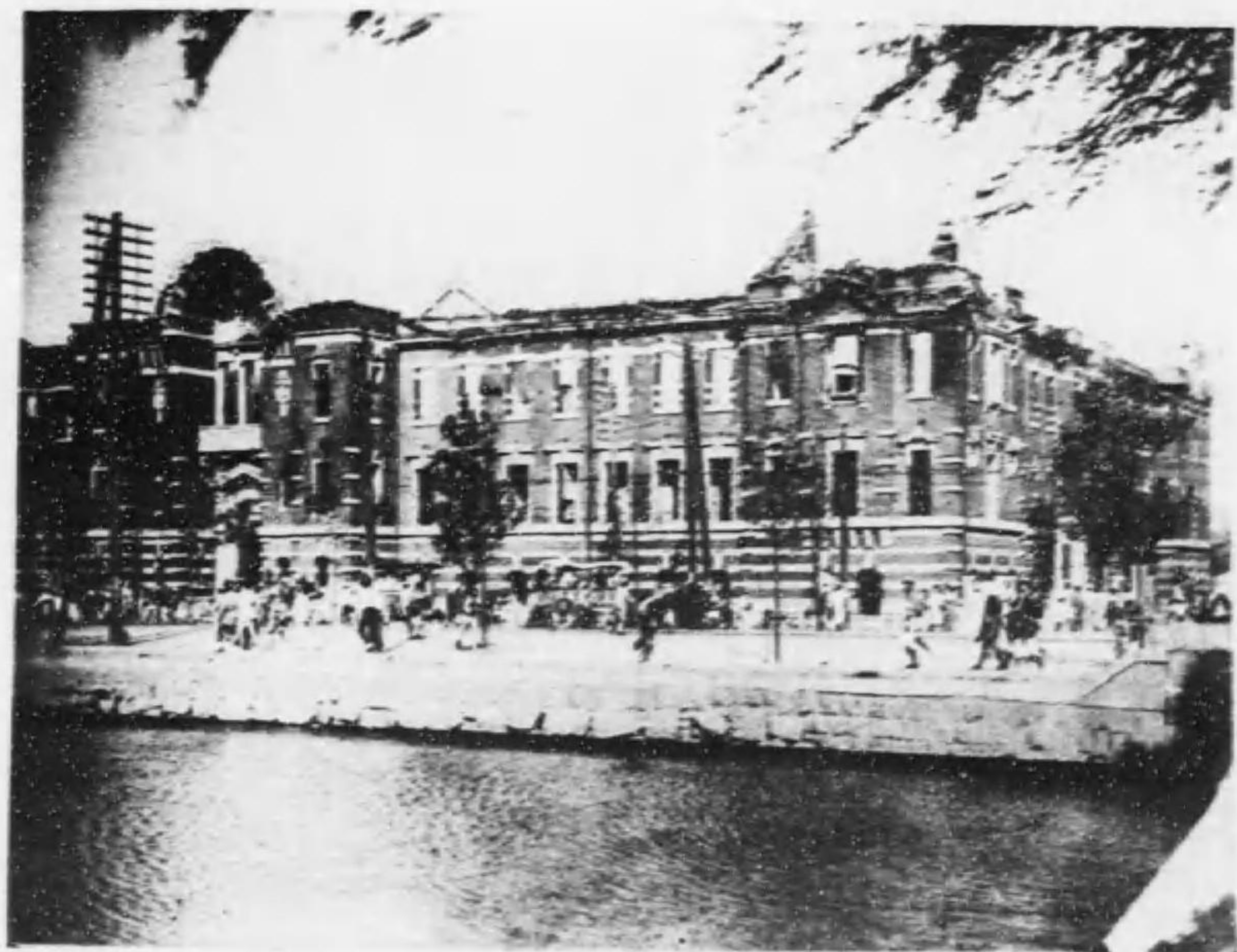


焼け崩れたる
淺草十二階



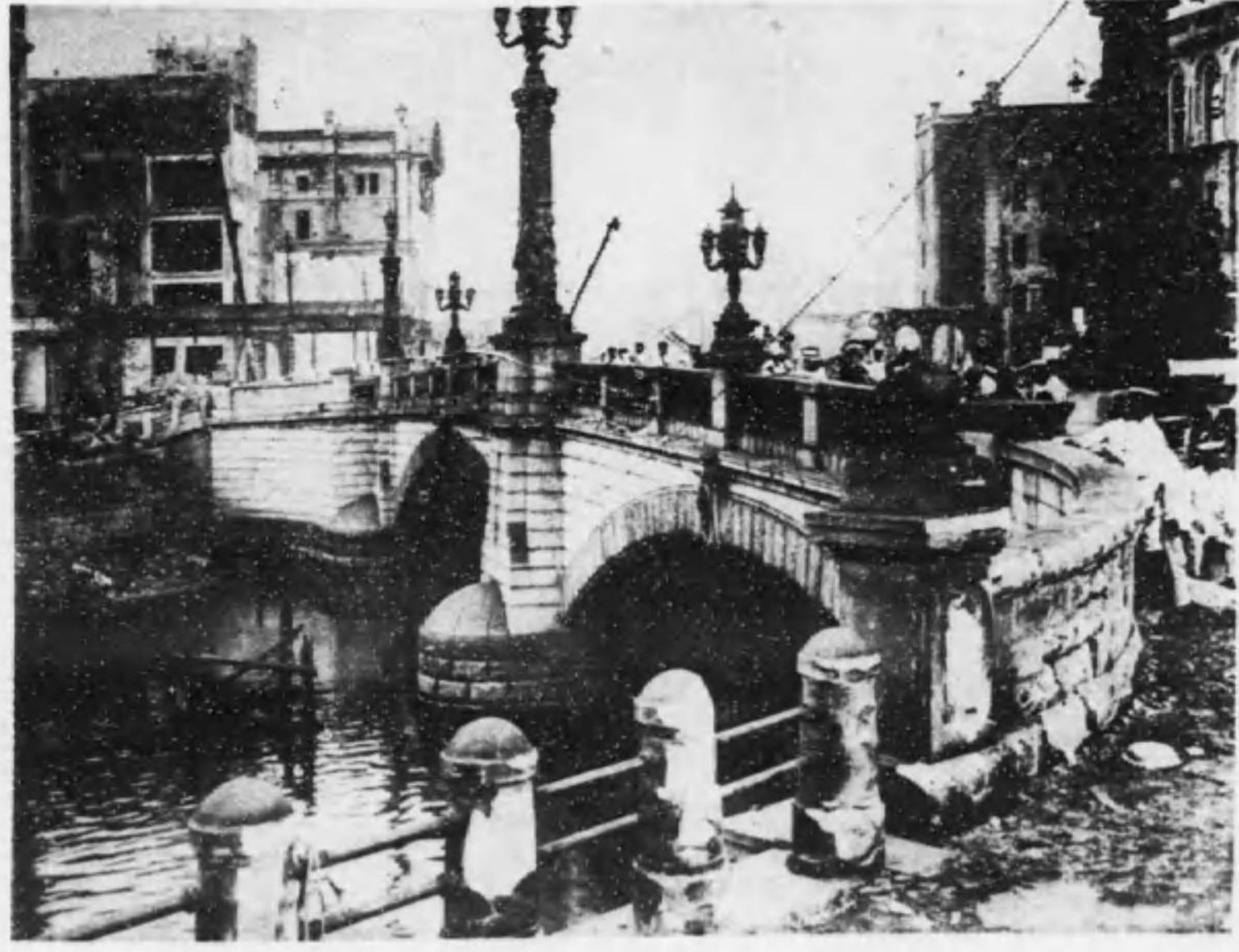
九月十五日震災地御視察の
攝政宮殿下
上野公園御着

文部省の焼跡



猛火に包まれたる
警視廳

廢墟にのこれる
日本橋



須田町附近の焼跡
外廊のみ残れる萬世橋驛
立てるは廣瀬中佐の銅像



大横濱の橋附附近の裂



外廓のみの三越呉服店

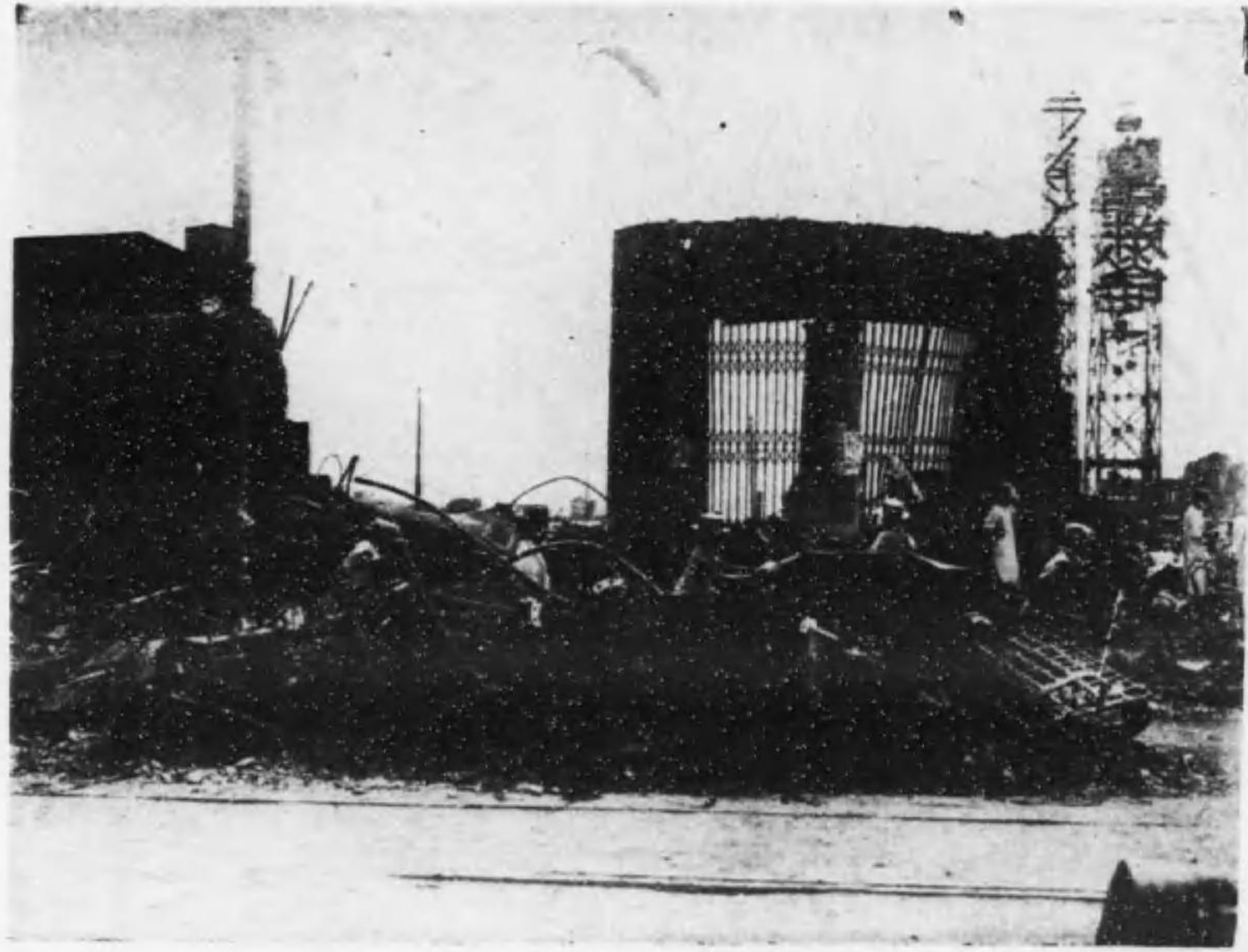
上野驛の慘狀



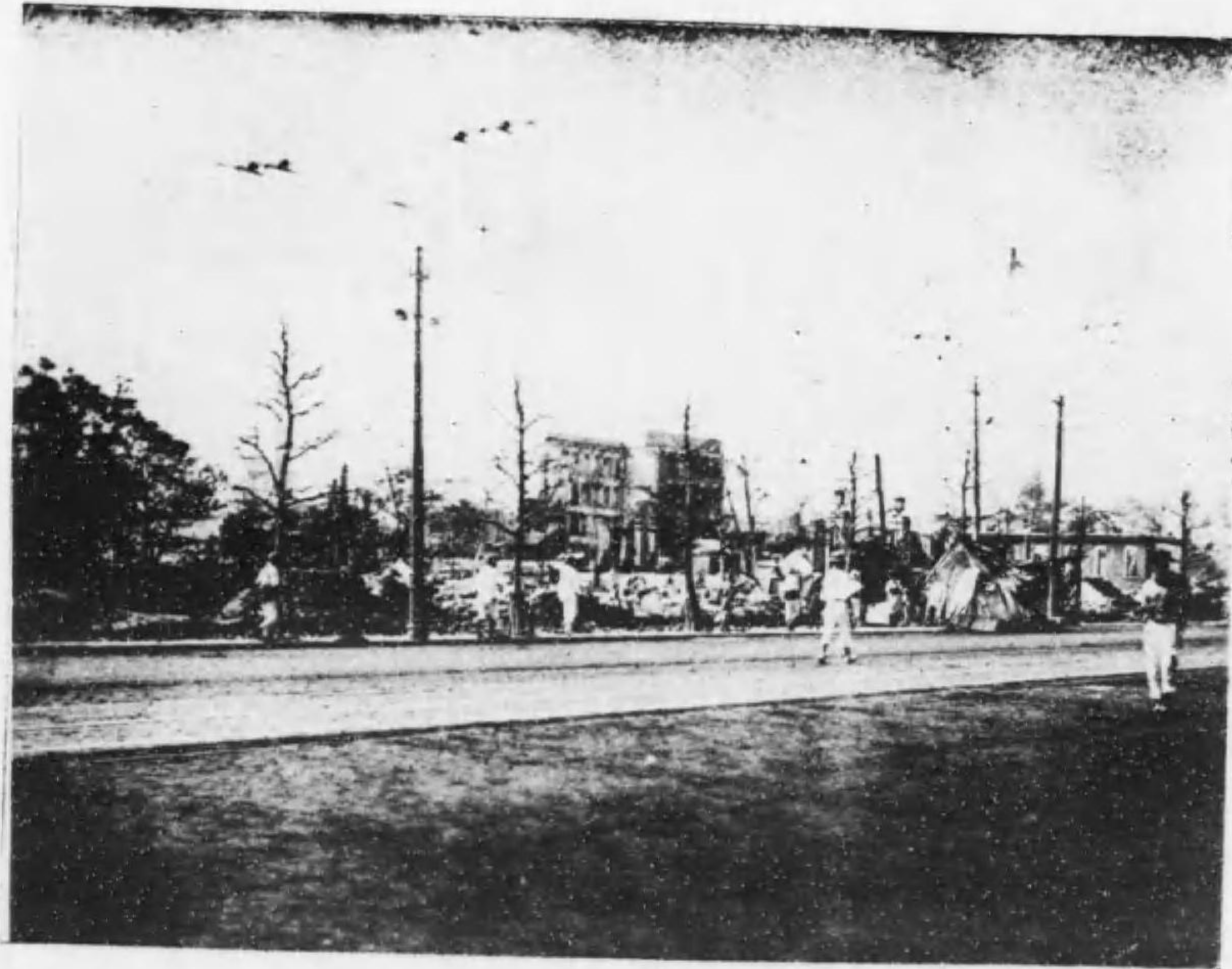
新橋より見たる
銀座街



松坂屋伊藤呉服店の惨状



内務省 大藏省の焼跡



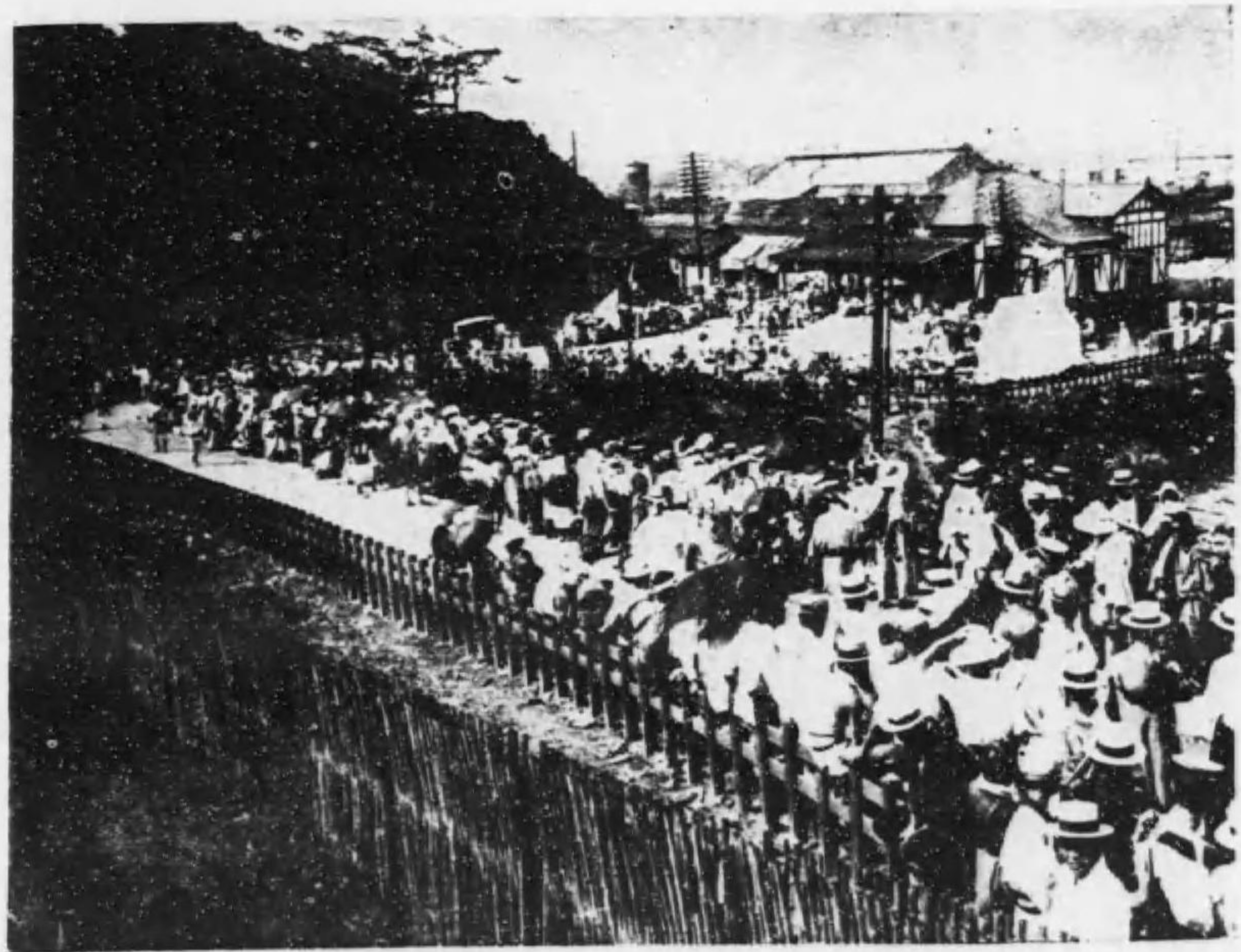
駒形附近の跡跡より
既橋を望む



銀座尾張町より見たる築地歌舞伎座附近



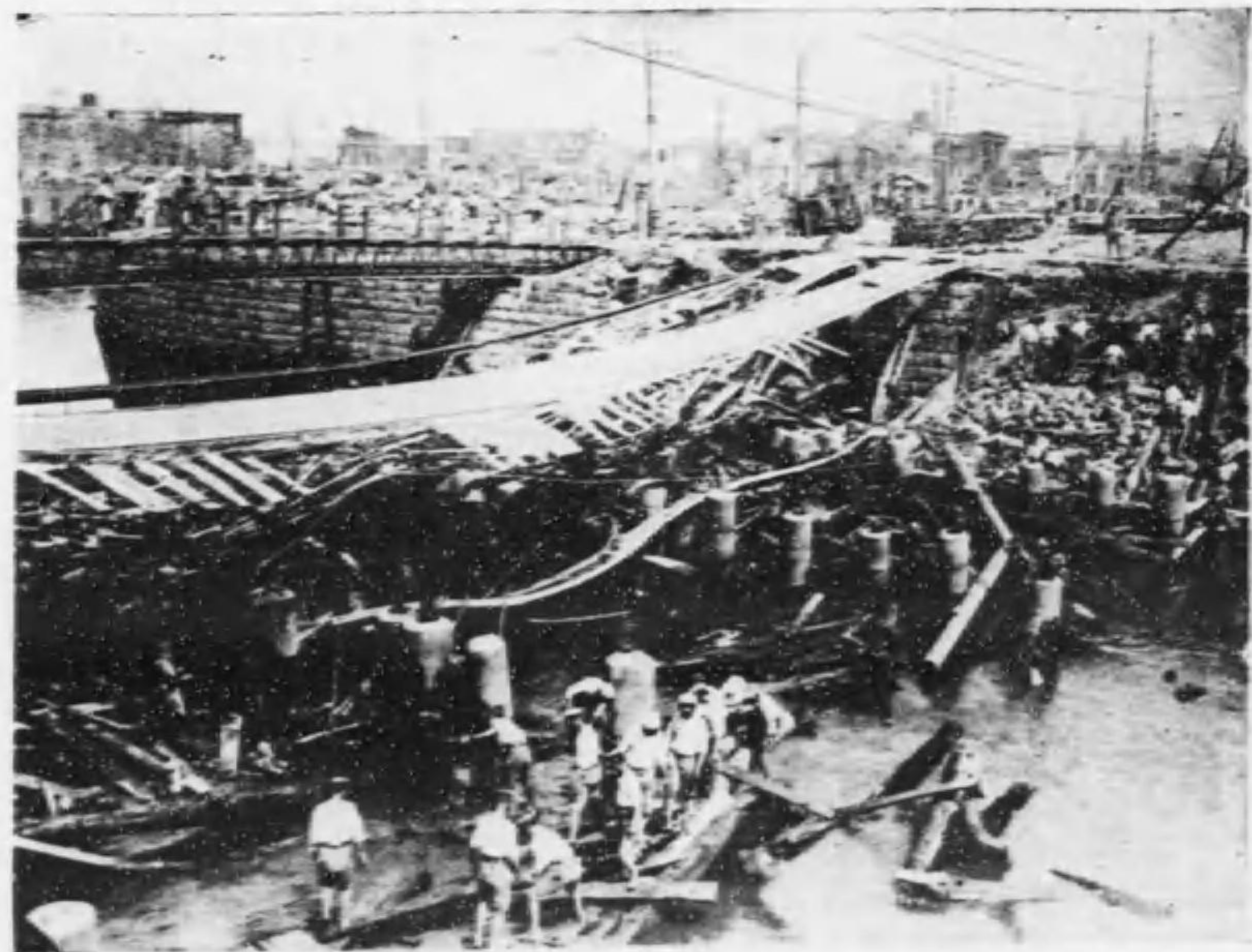
田端停車場より地方に避難する罹災者の行列



日本橋通の惨状

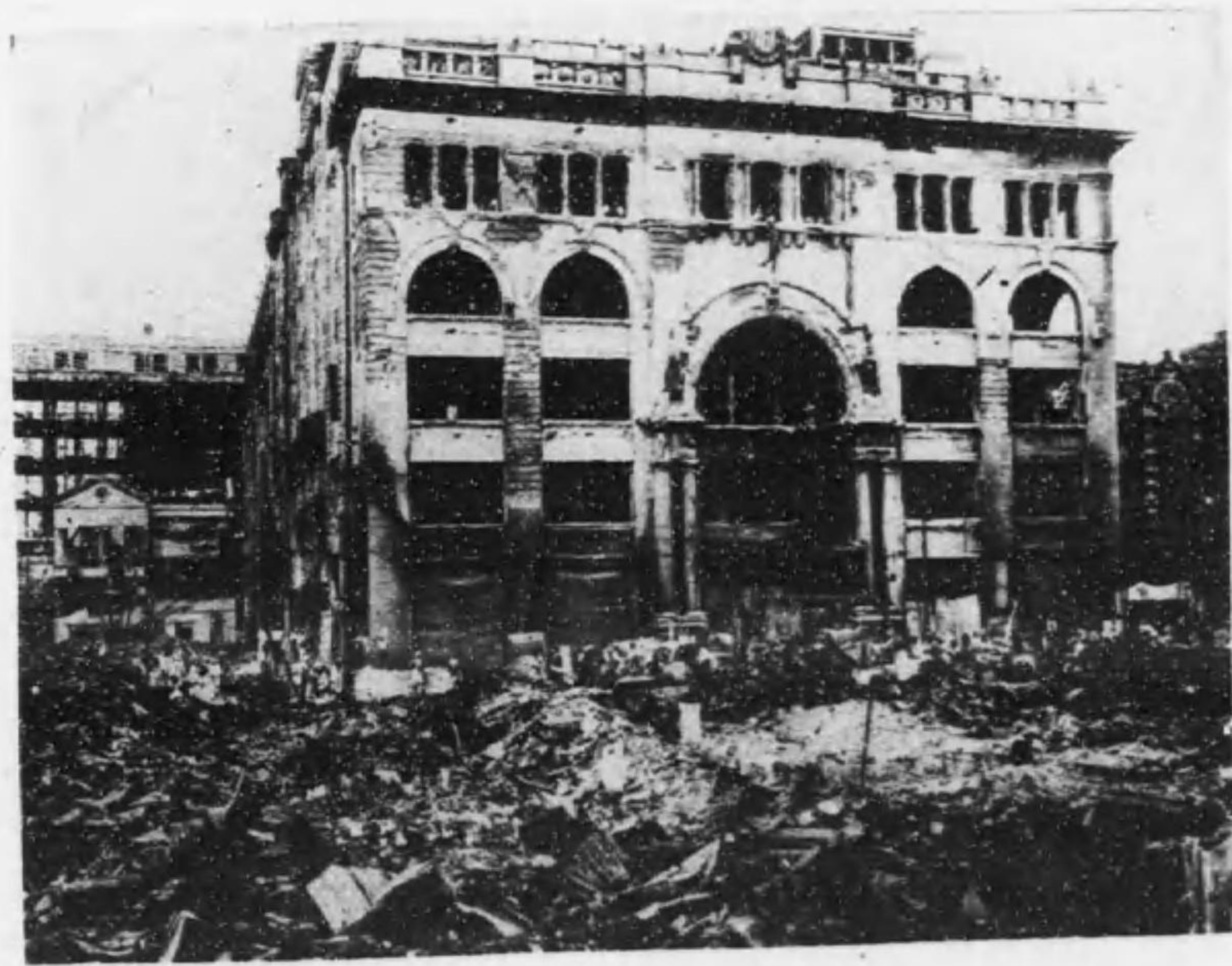


横濱足曳町市電線路の大破損



惨落せる神田橋

鐵骨のみ残れる吾妻橋



慘狀を極めたる三越呉服店と其の附近

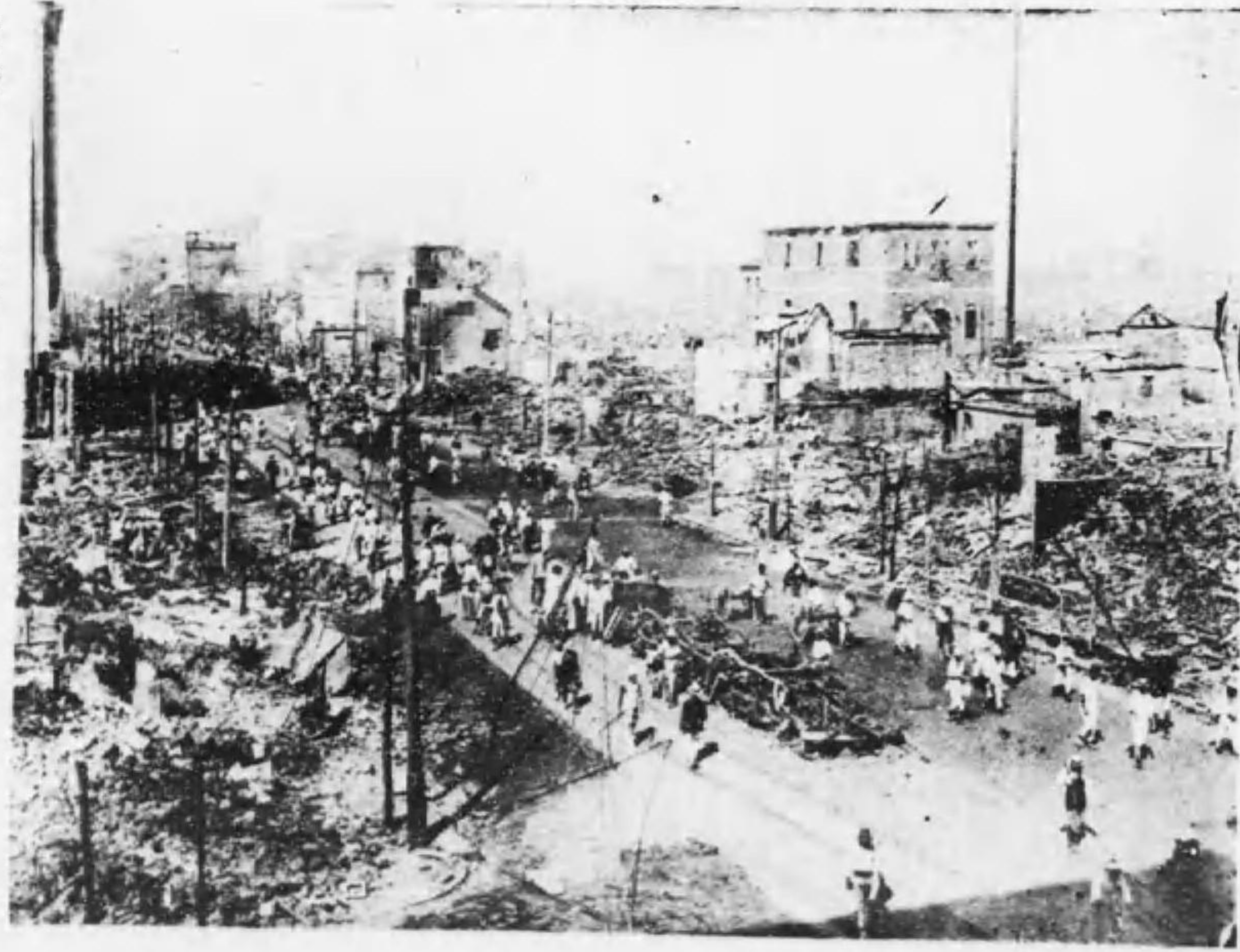


景光の送輸者難避てに車蓋無



深川方面の焼跡

京橋より日本橋方面を望む



横須賀郵便局の倒壊



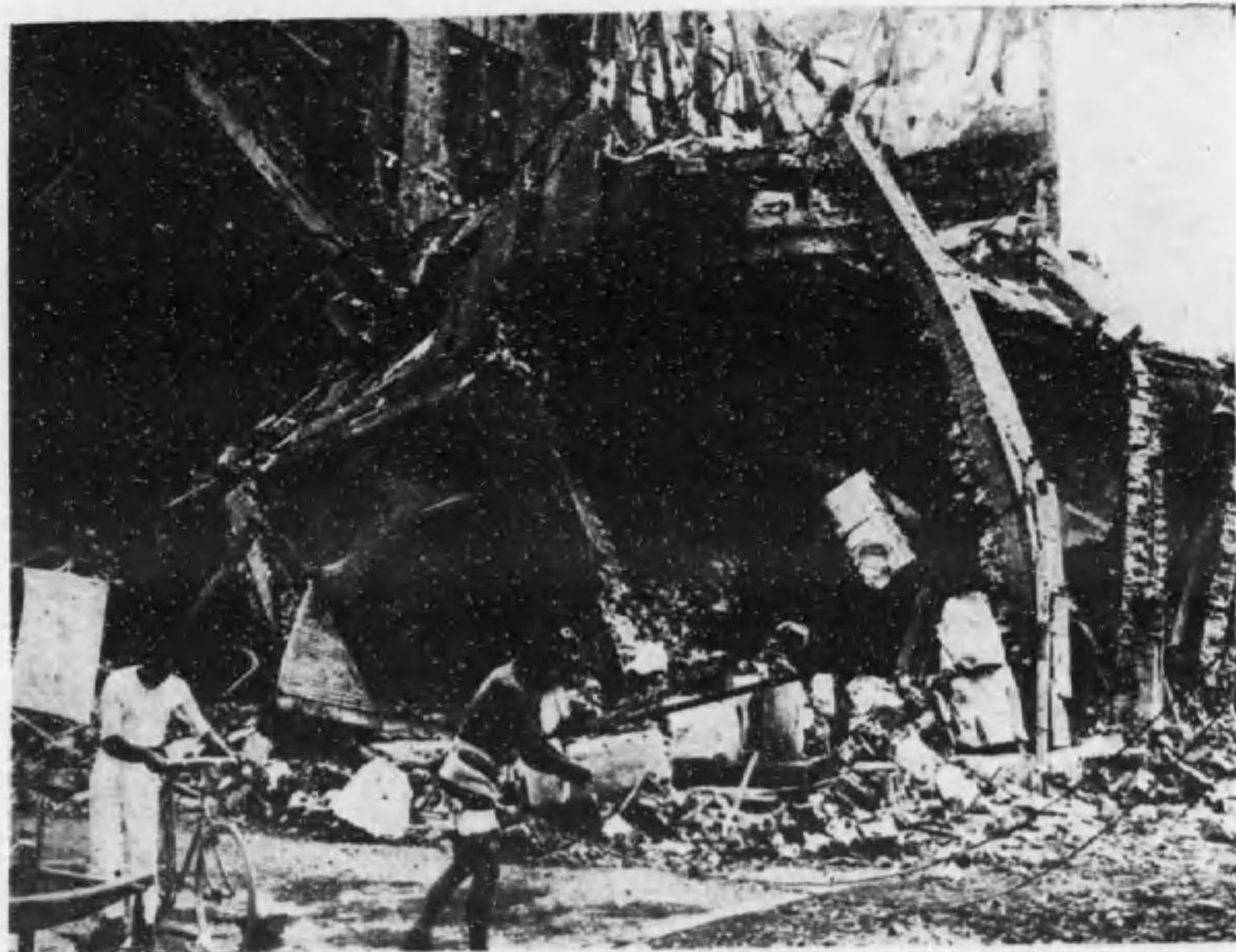
横濱山下町方面の惨状



横須賀深里通りの倒壊家屋

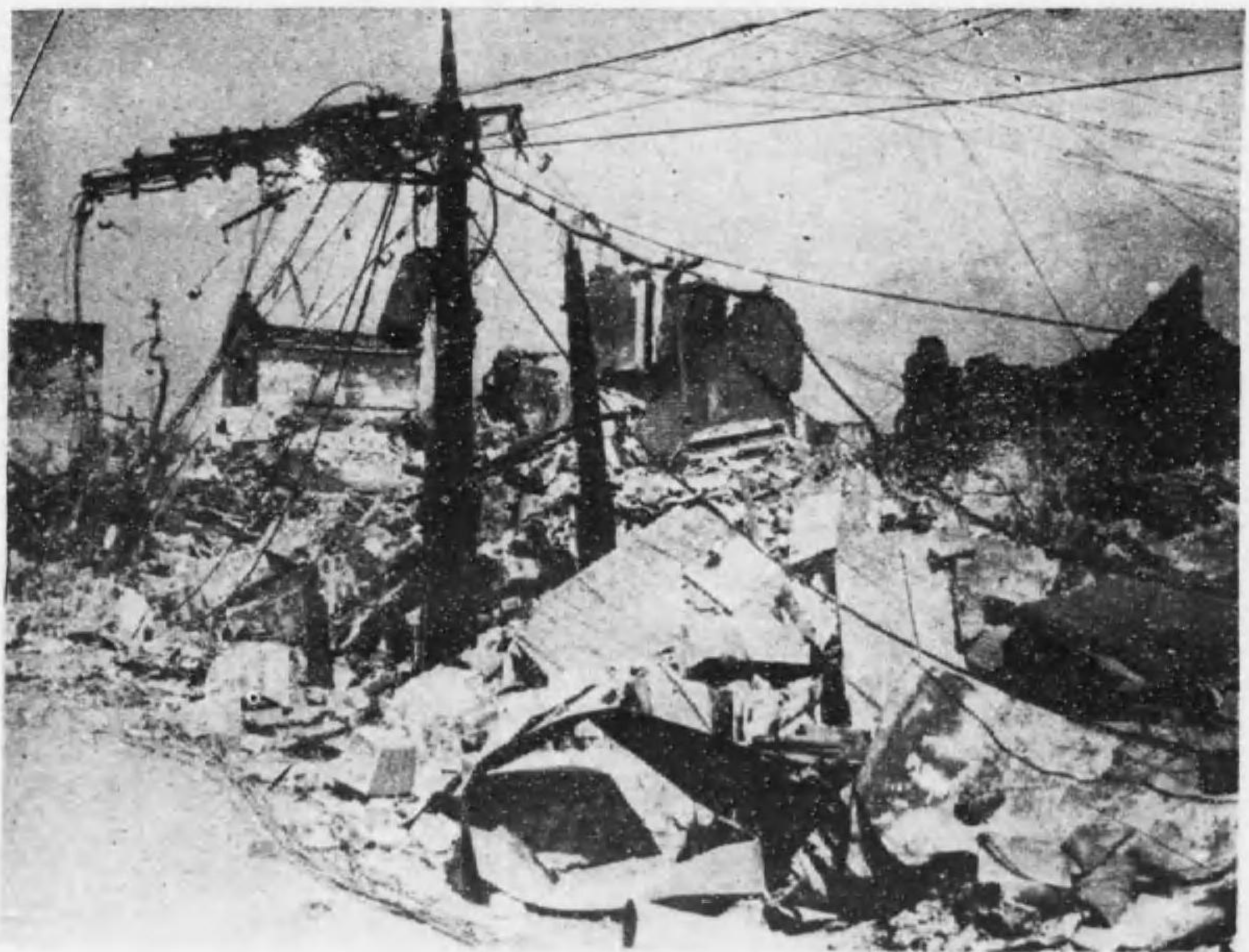


丸善株式會社の慘狀



日本橋白木屋附近





横濱本町通の惨状



札貼退立 人ね尋

横濱櫻木町驛より見たる横濱驛附近の焼跡



關東之大震災

目次

一、地震と火災來……………	一
二、暗黒世界と焦熱地獄……………	三
三、四十時間に三十三萬戸……………	四
四、慘禍十五區……………	六
五、東京市の焼失家屋……………	一三
六、變災第二日に内閣成立……………	一八
七、聖恩と臨時支出……………	一九
八、闇勅と緊急勅令……………	二〇
九、大地震の經過……………	二四
一〇、御遺難の宮家と名士……………	二六
一一、東京市の犠死者……………	二八
一二、焼失した諸官廳……………	二八
一三、火災と其の原因……………	二八
一四、戒嚴令と暴漢逮捕……………	三一
一五、軍隊配置と兵力……………	三一
一六、官廳の物資蒐集……………	三三
一七、被難者收容のベラツク……………	三三
一八、焼残つた三大寺……………	三四
一九、東京市の損害程度……………	三五
三〇、帝都復興會議……………	三七

大正
12.11.3
内交

二一、震災救護と善後會……………	四〇
二二、横濱の大災害……………	四三
二三、品川大森の惨害……………	四八
二四、鎌倉も亦殆ど全滅……………	四九
二五、小田原方面の惨害……………	五〇
二六、横須賀の惨害絶大……………	五〇
二七、伊豆方面の惨害……………	五二
二八、千葉縣下の惨害……………	五三
二九、埼玉縣下の惨害……………	五三
三〇、最初の暴利合連反者……………	五四
三一、東京の焼失面積……………	五五
三二、災後の東京人口……………	五六
三一、内外人の同情……………	五七
以上	

關東之大震災

序

關東之大震災は、予が主牽する交通運輸社の編輯局主任、村島亮君の編著に成れるものである。村島君は今回の大惨禍に遭遇し。家財と居所とを焼燼され、僅に身を以て免れたる氣の毒千萬な人である。然るに災後僅々旬日を過ぎずして、身自ら體驗せる震慄すべき大地震と大火災との恐ろしき實況を編述し、以て當時の光景を一般世人に知らしめんとの希望から、予に向て之が刊行を委托さる。惟ふに此の種の著述は今後必ず相當の數に達し、其の記實も亦益々詳細精密を加ふるに至るべきは、素より疑ひを挾むの餘地なきが、身は未曾有の災害に襲はれて、裸體同様の境遇を強ひられ、眠るに家なく、養ふに食なき悲惨なる罹災者の群に處り、露宿の晨、立食の時間をも惜みつゝ、有合せの紙に向つて自家が遭

遇せる實驗の一斑を記し、以て空前絶後の災害の紀念録たらしめんとす、其の努力や真に敬すべし。予は即ち此の理由よりして廣く本書を江湖に推薦す、江湖の諸彦亦必ず此の不幸なる罹災者が、几有ゆる欠乏と闕ひつゝ、本書を完成したる努力に對し、十二分の同情を寄せ給ふべきを信じて疑はず。

大火の餘燼未だ紅燄を放てる時
交通運輸社假編輯局に於て

荻野孝廉

關東之大震災

荻野孝廉補修
村島亮編著

地震來、火災來

大正十二年九月一日、日本帝國の首府たる東京市は、突如として千古未曾有の大慘禍に遭遇した。此の日は早朝から可なりな降雨があつて、午前十一時前に霽れ上り、輕快な日光が洗ひ流された千門萬戸の聲を照して、平和に且つ幸福に此の一日を送るべく何人にも豫想されたのみでなく、古來の慣習たる月の初めの休息日であつたので、靜かに家庭の和樂に親しむもあり、又は淺草其他の遊園地に赴くもあり、或は一月の計を立てるに餘念なき人もあつて、誰か帝都の破滅、一身の浮沈が眼前に迫りつゝあつたのを知るものがあらう、然り神明以外人は凡て盲目であつたのだ。

然るに正午前二分即ち午前十一時五十八分、一大鳴動が帝都の上空を震撼すると同時に、恐るべき地震の襲來となり、莊嚴華麗を極めてゐた花の都は、僅々一二分時の後に破壊され阿鼻叫喚の修羅場を現出したのだ、其の光景の凄慘さはと

うである、烟塵濛々として視界を遮り、老弱男女東西に馳せ逃ひ、南北に逃げ迷ふさま、迎も筆や口では盡されぬ。斯る間にも震動は殆んど連続的に都人士の心膽を奪ひ去り、人々先を争ふて安全な避難所を物色する折も折、火災は帝都の各方面に突發した。即ち本所、深川、淺草、神田、下谷、京橋、日本橋、芝、本郷、麴町等の各區數十ヶ所に炎々として火の手を揚げ、其の火勢が又頗る猛烈を極めてゐる。當時既に水道は地震のために破損の箇所を生じたから、全都一滴の水もなき有様となり、消火に對する根本的機能が失はれた。一方にはまた消防士が大抵地震の爲に度膽を抜かれ平素の活動が出来ぬので、火は取謂る焼け放題に猛威を振ひ、四方八方に延焼して、鎮火の見込が更に立たず、近衛、第一師團の軍隊が出動しても寸功なく、正午過ぎから燃え出した火は、午後三四時頃には最早援ふことの出来ない大火となつてしまつたのだ。

既に震災に戦き慄へた東京市民は、是に至つて又もや火災の爲に脅威され、恐ろしい運命が眼前に迫つて來たので、我勝にと各自の衣類や家財を運び出し、最寄りの神社佛閣、公園又は大道の廣場に向つて殺倒し、親は子を呼び、妻は夫を尋ねつゝ、不安の胸を撫てあらず暇もあらせず、三十餘ヶ所に發つた火災は、あたり構はず延焼して、後には二ヶ所、三ヶ所づゝ相合し、紅蓮の燐物凄まじく、西に東に荒れ狂ふて、避難の場所すら引包まん形勢なので、罹災者が折角運び出した家財道具も再び他所へ移すもあり、目欲しい品のみ身に着けて宛もなく立退くがあり、其の混雜は全く以て名狀し能はぬほどで、坐ろに戦場の状態さへも偲ばはれるのだ。

暗黒世界と焦熱地獄

延焼又延焼、黒烟は天を掠め、紅蓮の火焰は大廈高樓を舐め廻りつゝ、三百年來培はれた文明の都を滅盡せんとする間に、夕陽漸く西天に暮き、暮色は蒼然として迫つて來た。平日ならば此の時刻は街上も屋内も、明煌々たる電燈に飾られて、満都は光の海となるのであるが、大地震襲來と同時に多くの變電所は故障を生じ、電車は停止し、電燈も點火不能となつてゐるので、夜の幕は深く垂れ籠め、満都は黒暗々たる裡に包まれた。さりながら這は實に暫時の事で、四方八方に燃え盛る大火は次第に光を加え、嚇々として天地を照すこと白日を欺き、毫末の微も見得る程物凄。さもあるべし初夜の頃には彼此合併した火先のみで五十餘ヶ所、幅五六丁より十餘丁にも及ぶのが、二三十丁から一里以上の長さを流れて燒き立てるため、満都は宛がら火の海で、殊には兩本願寺其他の太伽藍、又は、各所に屹立する代表的大建築物が炎々と

して火を吐くさま、凄絶と云はんか壯絶と評せんか、殆んど形容するに言葉のない光景を呈してゐた。昔は秦の咸陽宮、楚人の爲めに火を放たれ、延焼三月に及んだと聞く。素より是れ二千年前の歴史に残された記録なので、其の實否は問ふに及ばぬが、我等が現在目撃した東京市の大火災は、世界に類例なしとさへ傳へらるゝほど、それほど猛烈殘虐を極めてゐるから、到底之を見ぬ世の昔と比較する譯にはゆかぬ。それは借をき十三區五十餘ヶ所を狂ひ廻り荒れ廻る未曾有の劫火は、刻々時々範圍を擴げ、幾千百萬の罹災者が避難する幾多の安全地帯に攻め寄るので、市民の恐怖心は絶頂に達し、悲鳴を擧げて右往左往に逃げ惑ふ、其の有様はまさに是れ叫喚大叫喚の焦熱地獄である。

四十時間に二十三萬戸

凄絶慘絶、暗澹として地上を掩へる火焰と黒烟とは、まさに全市を滅亡に導きつゝあるに反し、天上には半輪の明月無心の光輝を放ちつゝ、玲瓏玉を敷かんとせる態、何といふ皮肉の對照であらう。然り皮肉大皮肉、而も無數の罹災者は斯る現象には頓着なく、喪心せるもの、悲痛せるもの、同じく共に疲勞困憊の色を湛へて、上野公園、根津神社、招魂社境内、宮城前、赤坂離宮前、日比谷公園其他に向つて殺倒避難

する。此の間も火勢は更に衰へず、夜半より黎明、黎明より早朝にかけ、風力すら一層強烈の度を加へて來て、淺草、下谷、神田等に残存せる家屋は、忽ち猛火の襲ふ所となり、本所、深川、芝、麴町等各區の火と相對して、一木一草をも餘さじと焼き立てた。

這んな具合に二日も淺草、下谷、麴町の三區を焼き、三日の午前五時前後下谷池之端數寄屋町を最終として、僅かに鎮火することを得た。但し此の方面には最早や焼くべき家屋がないから、さしもの大火も自然的に鎮火したと言つてもよい。此の間實に四十時間に亘り、焼失家屋は三十三萬戸に上つてゐる。尙ほ此の外の罹災地としては、市外南千住、三輪、大島等の一部分と、日暮里、太久保の少部等で、面積から言ふと東京市の五割餘見當に過ぎないが、戸數からすると實に三分の二に相當する被害である上に、焼失した區中には、京橋、日本橋、神田、淺草、下谷等、帝都繁華の中心地たる下町があり、山の手にても本郷、麴町、芝等の樞要地が灰燼に歸したので、假令無事な牛込、麻布二區と小石川、本郷、四谷、赤坂の大部分や芝區の過半が残されても、事實上東京市の全滅を意味される次第である。況んや工業地たる本所、深川二區亦全滅の運命を強ひられたので、形體に於ても精神に於ても、今後幾十年の後でなければ、再び以前の花に都は見

ることが出来ぬ譯である。

慘禍と十五區

△麴町區 九重雲深き大内山も、此の度の災害には漏るゝに由なく、可なり激甚な被害があつたと傳へられる。即ち最初の激震と同時に宮城御内儀の四壁は崩落し、屋根瓦は全部破壊墜落した外、大膳職、宮内省内外も同様の破損を招き、又二重橋正門、乾、大手、山下、櫻田、半藏、和田倉の諸門も大抵傾斜し、内堀の石垣は數ヶ所崩れ落ち、凱旋道路は陥没龜裂の箇所が出来た、然し幸にして宮城内には一人の死傷者も出さなかつたのが幸福である。

右の外本區内の被害を挙げると、正午過に有樂町から出た火先は、南方帝國ホテル前通りである、東京電燈本社、日比谷大神宮、大松閣、有樂座、警視廳、帝國劇場、電氣局等の大建築其他を焼拂ひ、一方東京驛の北方から發した火は、鐵道省、興業銀行、印刷局、中央電話局、内務省、大藏省、文部省、稅務監督局等の大建築其他を舐めて、神田橋の外堀に及んでゐる。又區の高臺方面では、麴町大通りを一丁目から六丁目まで焼き拂ひ、南は平河町、北は三番町の南部から富士見町、元平河町、平河町、隼町、紀尾井町等を焼き、別に九段下の飯田町全部を灰燼に歸せしめた。此の兩方面の大建

築中重なるものは、平河天神、麴町區役所、同警察署、郵便局、佛國公使館、英國大使館、國學院大學、飯田町驛、番町に薙を競ふ大建築等で、多少の破壊を被つたのは有樂館、海上、丸の内、郵船の三ビルディング、東京會館、全く無難なのは東京驛、東京日々新聞社、靖國神社、衛戍病院等で、其他の地域は概ね無事に残存した。

●神田區 本區内では正午過各方面に發火して、數道の火先次第に猛威を逞ふし、一日から二日朝にかけて、西神田、東神田、内神田、外神田に密集せる數萬の家屋を焼き盡した。人も知る通り此區の西部は大小無數の學校を有し、東京中の學府であつたが、惜い哉商科大學、專修大學、日本大學、明治大學、中央大學、外國語學校、其他多數の學校を初め、萬世橋驛、神田郵便局、同區役所、西神田、外神田、錦町の各警察、一ツ橋圖書館、ニコライ會堂、神田劇場及び、銀行、會社、多數の大商店等も烏有に歸し、一望慘憺たる燒野原と化してしまつた。

●日本橋區 第一回の激震後、間もなく火は各所に起り、炎々として紅蓮の火焰を漲ぎらし、殊に京橋、神田等から延燒して來た火先は東西南北に燒け擴がり、日本全國里程の中央元標地たるのみでなく、江戸以來の商業中心地たる日本橋も僅か一晝夜の間に華麗な装ひを焼き盡され、戰場以上に悲惨

蕪まる光景を呈した次第だ。区内で焼失した重なる建築物中には、日本銀行、三井銀行、三越、白木屋の大呉服店、中央電信局、株式取引所、米穀取引所、三共製薬株式会社、鴻池銀行東京支店、中外商業新聞社、明治屋等を始め、幾多の大問屋大商店、常盤木倶楽部、相互倶楽部、明治座其他、數を盡して灰燼に歸した。

●京橋區 此の區も全部灰燼に歸してゐるが、最初發火した場所は山下町附近で正午過ぎに火の手を擧げ、加賀町、宗十郎町、日吉町、丸屋町、金六町等、新橋の花柳地附近を一畝にし、銀座通から木挽町へと延焼し、折柄の南風に煽られつつ、日比谷方面からの飛火と合して、其幅十數町の火の海は、東京目貫の銀座通りを焼拂ひ、一氣に京橋を越え、西河岸、五郎兵衛町、疊町、南傳馬町、仲橋、炭町、具足町、松川町等を焼き盡し、東西仲通、電車通りから日本橋區に延焼した一方、木挽町の火は築地、新富町、明石町、水谷町、新榮町、南本郷、南飯田町等から芝岸島に入り、新川、新堀も瞬く間に焼土と化した。そして佃島、月島方面にも火災を起し、是れ亦全部焼拂ふた。此の災厄に焼落ちた重なる建物は、逓信省、農商務省、區役所、築地、北紺屋、月島の三警察署、建築中の歌舞伎座、海軍大學、水交社、造兵廠、精養軒、第一相互保險、國民新聞社、星製藥會社、高島屋呉服店などを初め、

市内有數の大商店軒を並べて烏有に歸した。

●芝 區 此の區の火は二手に分れ、芝公園を挟んで南は高輪の東宮御所を初めとし、別に田町八丁目から出た火は電車通の南側を北に進んで、田町一丁目三田の車庫等を焼き、此處で火の海は幅を廣めて、四國町の大通と本芝の大通とを引包み、東は金杉橋から神明町、濱松町、新錢座、西は西久保の殆ど全部に亘つて火勢を逞ふし、琴平神社附近少許を残したのみで、佐久間町、愛宕町、愛宕下町、田村町、櫻田本郷、同伏見、同備前町及び、烏森一帶、日蔭町、並に汐留邊も悉く焼滅の厄を免れなかつた。以上の中で重なる建物は、東宮御所、專賣局、日本電氣、芝浦製作所、戸板女學校、三田車庫、牧一教會、芝神明、大神宮、赤十字社、區役所、愛宕警察署、鐵道管理局、鐵道病院、汐留驛、新橋驛、新橋郵便局、慈惠病院、青松寺等を初め、無數の大商店が數を盡して焼滅した。

●赤坂區 此の區の被害は比較的輕微で、山王下の低地たる田町、溜池附近一帶から、本赤坂町、仲之町、一本町、丹後町、氷川町、臺町、新坂町、榎町、青山南町、同北町、三筋町、六軒町、權田原、高樹町、福吉町の大部分を焼いたが、幸にして高臺地は無事であつた。焼失した重なる建物は、米國大使館、大會古館、内閣記録編纂所、大會商業、大會男爵邸

等である。

●麻布區 此區は震災の被害があつた外、我善坊、仲之町、谷町の一部、市兵衛町の大部を焼いたが、他に比して輕微な損害であつた。

●四谷區 此區の被害も比較的輕微で、北裏町一、二丁目、遊廓と電車々庫を焼き拂ふた外、全部無事である。

●牛込區 此の區は相當なる震災被害があつた外、市ヶ谷本村町、士官學校を焼いたのみで、損害は輕微である。

●小石川區 此區での災害は砲兵工廠が随一で、殆んど其の全部を焼失し、同所の火先は新諏訪町から大和町、仲町、江戸川町の大半を焼き拂ふた、然し後樂の名園は大した被害はなかつたといはれる。

●本郷區 砲兵工廠の火は隣接してゐる本郷元町に移り、本郷五丁目を一紙めにして東竹町、西竹町、春木町、金助町、湯島新花町、三組町、同天神町、同朋町、切通坂町、妻戀町等を焼き拂つて、天神社前で辛くも鎮火したが、一方大學から出た火は同校の一部と病院とを全焼したゞけて、他には延焼しなかつたのが、何よりの幸福です。

●下谷區 此區の被害は頗る大きく、上野櫻木町、同花園町谷中方面の全部、根岸の全部、池の端茅町、同七軒町、和泉町、佐久間町二三丁目、松永町の一部と、上野公園とを除く

外は、凡て焦土と化してしまつた。區内で最初の發火は二番町三ッ輪輪試験所である。丁度一日正午十二時半頃、竹町青年團員が火を用心して下さい、二長町が出火ですと叫び廻つたので、何れも戒心を怠らなかつたが、此の時は既に日本橋と神田とで猛烈な火災が起つてゐたから、同區は折柄の南風に火の粉を浴び、人心いやが上に亂れ騒いだ。のみならず強震は斷續として襲來するので、火元に近い人々は早くも避難の準備をなし、家財道具を運び出す爲め、街路の混雜は實に一方でなかつた。兎角する内に火は益々勢力を加え、更に神田方面からの火先が秋葉停車場を襲ひ、延焼又延焼、あわや全區を一紙にせんずる有様であつたが、夜に入つて風位が變り三輪、新坂本、坂本、上下金杉、豊住、山伏、萬年町、車坂方面南北稻荷町、西町、御徒、仲徒などの方面は、頗る安泰に見受けられ、上野驛附近亦最安全地帯として、淺草、本所方面の避難者が殺倒してゐた所、二日早曉から風勢烈しく、吉原方面から分れて入谷、三輪方面に入つた火先は、西北風に煽られて坂本、新坂本、豊住、萬年、山伏、車坂から北稻荷町に掩ひかかり、一方には龍泉寺、光月町方面からの火が延びて上野以南は全く焦土と化してしまつた。従て區内で重なる建物だつた、上野驛、下谷區役所、郵便局、上野警察署、坂本警察署、松坂屋呉服店其他大旅館、大商店等數を盡して

焼失し、見る限り茫々たる一面の瓦礫場となつてしまつた。

●浅草區 此區の被害は最も甚大で、京橋、日本橋、神田の各區と擇ぶ所がない。一日午前十一時五十八分最初の激震が天地を震撼するや、公園十二階の六階以上は轟然たる大音響と共に落下して、塔下の家屋を破壊すると同時に、忽ち炎々たる火災を起し、六區五區は見る間に火焰の下に包まれ、次で千束、龍泉寺方面に延焼したが、此時吉原廓内でも既に火を起し、烈々たる火勢を舉げて居たので、端無くも龍泉寺方面の火と相合して、瞬時の間に吉原を焦土と化し、五十間から山谷、田町一帯は言ふに及ばず、橋場、今戸、山之宿、花川戸方面を焼き盡し、廣小路から電車通りを挟んで淺草橋まで焼き立て、一旦火勢は弱くなつたが、二月の早晚風位が變つて、光月町方面から入谷に焼け込んだ火が西北から松清町北清島町方面に掩ひかゝつて、東本願寺別院其他有數な大建築を焼き盡し、餘焰南部の残存家屋を焼き拂ひ、二日午後に至つて漸く鎮火を見た。區内に於ける重なる建物は、東京電燈、專賣局、高等商業、明治病院、東本願寺別院、法恩寺、幡隨院、淺草公園の各劇場、活動寫眞館其他無數の大商店等數を盡して烏有に歸した。只幸福なのは淺草寺本堂や五重の塔其他が焼残つたことで、是れのみは東京より江戸、江戸より幾多の星霜を廻つた上世の紀念として、將來永く市民の頭

腦に印象するであらう。

●本所區 此區は最も被害の激甚な土地で、全区悉く焦土と化し、死傷者の數も亦市内第一位となつてゐる。同區避難者の一人が語る所に依ると、初震と殆んど同時に四方に火災が起り、火の手が舉ると見る間に宛がら旋風の舞ふ様に、火勢四方に擴がつて延焼又延焼、遂に一戸も残さずに焼いてしまつた。區内での重要な建物は、陸軍糧秣廠、國技館、兩國驛、錦糸驛、第三中學校、相生警察署、原庭警察署、太平警察署、向島警察署、木場の材木問屋其他、無數の大商店、壽座等も烏有に歸した。そして最も悲惨を極めたのは、被服廠跡に避難した三萬三千餘の人々が、悉く猛火の爲めに焼死を遂げた一事で、眞に空前絶後の痛恨事と言ふべきである。

●深川區 本所區と同様に被害の極めて甚大な土地で、第一回の震動後間もなく洲崎遊廓に火災を起し、折柄の南風に火勢を煽つゝ同廓内を焼盡し、區内別に三四ヶ所に火の手を揚げ、渦巻く焰は物凄さまてに迅速に燃え擴がり、さしにも廣き深川區も遂に全く焦土と化してしまつた。區内の重なる建物だつた富ヶ岡八幡宮、不動堂、靈岸寺以下の大寺院、岩崎邸、深川倉庫其他の大廈高樓も、悉く烏有に歸して見渡す限り一面の燒野原となり了つた。

東京市の焼失家屋

今回の大震災、大火災の爲め焼失した東京市内に就て、市制調査課が精密なる調査を遂げた結果に依ると、總戸数は四十一萬一千三十五戸で、是等の家屋に居住してゐた罹災民数は、百五十四萬七千三百五十一人の多數に上つてゐる。其の内譯は左の通りである。

區別	焼失戸數	罹災者數
麹町	二、七九二	一、二五六〇
神田	四五、九五二	一六二、九八九
日本橋	二六、〇七七	一五二、三二六
京橋	五〇、七四九	一五八、四八〇
芝	一六、二七八	七二、四二九
麻布	九	〇
赤坂	三、八五一	一六、七八七
四谷	一、六〇四	六、四九四
牛込	四	〇
小石川	一、三六五	四、四三二
本郷	八、七九〇	三〇、〇三五
下谷	四八、〇七〇	一七一、九八六
浅草	八一、八七二	二八四、二九六
本所	七四、五八八	二七七、四五九
深川	四九、〇四七	一九七、〇七八
合 計	四一一、〇四六	一、五四七、三五一

此の計算に依ると今回の災害は、東京市中の家屋六割四分を焼滅したので、現存してゐるものは三割六分となる次第である。

▲麹町區 三番町、中六番町、富士見町(以上各一部)上六番町上一番町、元恩町、一番町、五番町、麹町一丁目より六丁目まで、元平河町、飯田町三丁目より五丁目まで、六丁目(一部)元備町、大手町、道三町、錢坂町、永樂町、有樂町、水田町(一部)

▲神田區 三崎町、西小川町、今川小路、北神保町、仲猿樂町、表猿樂町、猿樂町、駿河臺段町、鈴本町、東紅梅町、北甲賀町、南甲賀町、西紅梅町、小川町、淡路町、南神保町、通神保町、表神保町、錦町、雉子町、美土代町、佐柄本町、連雀町、新銀町、關口町、多町、須田町、皆川町、松下町、永富町、鎌倉町、蠟燭町、堅大工町、上白壁町、新石町、旭町、千代田町、西今川町、塗師町、觀治町、西乗物町、西福田町、美倉町、下白壁町、紺屋町、北乗物町、松田町、富山町、東紺屋町、東松下町、黒門町、小柳町、平永町、元柳原町、岩本町、東龍閑町、豊島町、富於町、江川町、松永町、花房町、仲町、旅籠町、金澤町、山本町、末廣町、河原町、台所町、松佳町、五軒町、榮町、龜住町

▲日本橋區 岩代町、岩附町、伊勢町、箱崎町、箱屋町、馬喰町、長谷川町、濱町、西河岸、西河岸町、人形町通り、本石町、本葺屋町、本小田原町、本材木町、本町、本銀町、堀江町、本船町、本兩替町、堀留町、通り樂町、富澤町、通り油町、通町、通り旅籠町、大傳馬盛町、大傳馬町、若松町、金吹町、蠣殼町、龜井町、龜島町、兜町、川瀬石町、上横町、茅場町、吉川町、横山町、渡町、米澤町、萬町、高砂町、橋町、田所町、浪花町、長濱町、中洲町、村松町、室町、魚河岸、掃正町、薬研堀町、矢ノ倉町、彌生町、松島町、葦屋町、小傳馬町、小網町、小船町、吳服町、小網仲町、小傳馬上町、明降町、龜砲町、安針町、青物町、佐内町、坂本町、堺町、北新堀町、北新町、南茅場町、三代町、新材木町、下横町、新大坂町、十軒店町、品川裏河岸、新和泉町、新乗物町、新右衛門町、新柳町、新葺町、品川町、久松町、東萬河岸町、捨物町、平松町、元柳町、元濱町、元大工町、元四日市町、元大坂町、

瀬戸物町、敷寄屋町、住吉町、駿河町

▲京橋區 石川島町、出雲町、因幡町、入船町、八官町、濱町、八丁堀仲町、西紺屋町、本港町、本八丁堀、本村木町、常盤町、富島町、大川端町、大銀町、岡崎町、尾張町、尾張町新地、桶町、小田原河岸、龜島河岸、川口町、上柳原町、加賀町、四日市町、竹川町、壘町、高代町、瀧山町、靈岸島町、宗十郎町、築地、月島西河岸通、佃島、月島西伸通り、月島通り、月島東河岸通、月島東伸通り、長澤町、長崎町、永島町、中橋和泉町、中橋廣小路、采女町、具足町、山城町、柳町、山下町、彌左衛門町、鑓屋町、松屋町、松川町、丸屋町、船松町、木挽町、五郎兵衛町、越前堀、明石町、幸町、三十四間堀町、金六町、銀座、舊佃島、北横町、北紺屋町、弓町、南本郷町、南飯田町、南小田原町、南新堀町、南紺屋町、南佐柄木町、南鍋町、南金六町、南傳馬町、南水谷町、南大工町、南朝町、南横町、南八丁堀、南鍛冶町、水谷町、新船松町、新港町、新築町、新富町、新佃島西町、城邊河岸、新佃島東町、新看町、壘町、銀町、日吉町、日比谷町、東港町、元島町、元敷寄屋町、炭町、鈴木町、(月島十五丁目を残す)

▲下谷區 上野西黒門町、東黒門町、同朋町、上野南大門町、長者町、徒士町、練馬町、下谷町、五條町、三條町、北大門町、池の端仲町、敷寄屋町、車坂町、豊住町、西町、竹町、二長町、南稻荷町、北稻荷町、山伏町、新坂本町、山下町、上野町、入谷町、金杉上町、同下町、龍泉寺町、三の輪町、車筒町、通新町、萬年町、上車坂町、下車坂町

▲本郷區 弓町(一部)本富士町、元町、東竹町、西竹町、湯島、新花町、金助町、天神町、三組町、妻戀町、切通町、梅園町、春木町、帝大橋内(一部)
▲赤坂區 新町、田町、福吉町(一部)溜池町、葵町、靈南坂町、三年町(一部)櫻坂町(一部)

▲芝區 琴平町、南佐久間町、西久保櫻川町、明舟町、巴町、葺手町、山城町、神谷町、愛宕下町、田村町、櫻田太左衛門町、善左衛門町、伏見町、兼房町、備前町、鍛冶町、和泉町、烏森町、日蔭町、芝口、源助町、露月町、柴井町、

沙留、三島町、宮本町、宇田川町、新錢座町、神明町、濱松町、新堀町、川口町、全杉濱町、金杉川口町、高輪西臺町、三田松坂町、君塚町(一部)

▲四谷區 新宿二丁目、三丁目(一部)、旭町(一部)

▲牛込區 士官學校校内(一部)

▲麻布區 我善町、車筒町(一部)

▲小石川區 砲兵工廠、新諏訪町、諏訪町、江戸川町(一部)、大和町(一部)、仲町(一部)、香羽町(一部)

▲淺草區 今戸町、八幡町、旅籠町、花川戸町、橋場町、西島越町、西三筋町、西仲町、地方今戸町、茶屋町、御藏前片町、老松町、神吉町、上平右衛門町、瓦町、茅町、龜岡町、吉野町、玉姫町、田中町、田町、田島町、田原町、代地河岸、高原町、並木町、永住町、向柳原町、馬道町一丁目より八丁目まで、黒舟町、山川町、柳町、山ノ宿町、松清町、松葉町、福富町、福井町、壽町、光月町、駒形町、小島町、榮久町、淺草町、阿部川町、淺草公園地、三間町、山谷町、左衛門町、材木町、猿若町、猿屋町、北元町、北清島町、北松山町、北三筋町、北富坂町、北田原町、北仲町、金龍山下瓦町、南清島町、南元町、南松山町、三好町、南富坂町、新福富町、新猿屋町、新旅籠町、下平右衛門町、新片町、新森田町、新須賀町、新谷町、聖天横町、聖天町、新吉原、新畑町、芝崎町、新吉原角町、新吉原江戸町、新吉原揚屋町、新吉原京町、新福井町、新吉原五十軒町、象湯町、東町、東仲町、東三筋町、森下町、元吉町、元島越町、森田町、千束町一、二、三丁目、須賀町、諏訪町、(淺草寺残る)

▲本所區 石原町、入江町、番場町、林町一、二、三丁目、花町、徳右衛門町、千歳町、表町、押上町、若宮町、茅場町、龜澤町、横川町、吉岡町、吉田町、横綱町一、二丁目、大平町、外手町、中ノ郷八軒町、同竹町、同瓦町、同菜平町、同元町、同原庭町、同横川町、長岡町、永倉町、長崎町、向島中ノ郷町、同蹟地町、向島押上町、同須崎町、同小梅町、柳島横川町、柳島町、柳島梅森町、同元町、柳原一、二、三丁目、松代町、松坂町、松井町、藤代町、小梅瓦町、小梅森平町、小泉町、荻井町、相生町一丁目より五丁目まで、編

米町、北新町、菊川町、北二葉町、鎌町一丁目より五丁目まで、三笠町、南二葉町、新小梅町、清水町、元町

▲深川區 伊澤町、一色町、伊勢崎町、入船町、石島町、今川町、蛤町一、二丁目、西森下町、西元町、西町、西六間堀町、西平野町、西大工町、西平井町、西永代町、西永代町、牡丹町、本村町、堀川町、豊住町、富川町、富岡門前町、常盤町、富田公園、富田町、富吉町、御舟藏前町、扇橋町、扇町、大島町、大住町、和倉町、敷矢町、龜久町、鶴歩町、上大島町、龜住町、吉永町、笠井町、佃町、永堀町、中島町、仲大工町、中川町、海邊町、裏大工町、黒江町、熊井町、大和町、八名川町、山本町、松村町、萬年町、松賀町、古石場町、冬木町、福住町、小松町、越中島町、安宅町、相川町、佐賀町、猿江町、村木町、猿江裏町、清住町、木場町、三好町、島崎町、島田町、茂森町、新安宅町、東森下町、東元町、東平野町、東平井町、東永代町、東六軒堀町、東大工町、平富町、久米町、平久町、東扇橋町、門前山本町、門前東仲町、門前仲町、元加賀町、諸町、千田町、洲崎辨天町、洲崎町

尚ほ郡部で火災に遇たのは三河島、南千住、寺島村、吾妻町、日暮里町、柳島等である。

震災第二日に内閣成立

大地震と大火災とが帝都を襲ふてゐるのに、内閣には責任ある人がなくては由々しき大事なので、大地は動搖、猛火は延焼を續けつゝあつた九月二日午後七時、赤坂離宮に於て山本内閣親任式が擧げられた。即ち左の通りの顔觸れてゐる。

任内閣總理大臣兼外務大臣 伯爵 山本 權兵衛
 任内務大臣 子爵 後藤 新平

任大藏大臣 井上 準之助
 任陸軍大臣 陸軍大將男爵 田中 義一
 任海軍大臣 海軍大將男爵 財部 彪
 任農商務大臣 男爵 田 健治郎
 任逓信大臣 犬 養 毅
 任司法大臣 平沼 騏一郎
 任文部大臣 岡野 敬次郎
 任鐵道大臣 山之 内 一 次

但し岡野、平沼兩氏は六日任命され、それ迄は田男と犬養氏とが司法、文部を兼任してゐた。

聖恩と臨時支出費

帝都の秩序は斯の如くして維持せられ、治安も亦漸次回復されつゝある一方、三日午後六時、天皇陛下には今回の震災にて帝都を初め各罹災地の住民が、未曾有の困苦に遭遇せるを聞き召され、畏くも御内帑金一千万圓を御下賜あらせられ併せて御料地の開放、御造營料の建築用材をも御下賜あらせらるべき恩令を賜つたと同時に、攝政宮殿下に於かせられても左の如き優渥なる御沙汰書を發表あらせられた。

御沙汰

今回稀有の大地震東京及近縣を襲ひ、之に加ふるに大火を以てし、其の慘害甚だ大なるは、實に國家生民の不幸なり。予は其の實狀を見聞して日夜憂戚し、殊に罹災者の境遇に對しては、心深く之を傷む。茲に内帑を頒ちて其の痛苦を慰めんと欲す、官民夫れ協力して適宜應急の處置をなし、以て遺憾なきを期せよ。

そこで山本首相は翌四日内閣告諭第一號を以て聖旨を布告し、閣僚と協議して當面の大問題たる食料蒐集に就て苦心を重ね、幸に海軍省と無線電信塔の完全であつた爲め、財部海相は之に依て各鎮守府、軍港等に通信をなし、糧食を軍艦にて輸送せよと訓令したので、各鎮守府軍港にても活氣を呈し大阪にて米六十萬石を積込むべき準備に着手された。次で政府は豫備金九百五十萬圓の臨時支出を決議して應急施設の準備をなし、更に第二回、第三回の支出をも辭せざる決心である。而して是等の財源は各種の剩餘金や、造幣局の益金を以て充當するといふことである。

詔勅と緊急勅令

前にも説いた通り、震災に原因する大火が炎々としてなほ燃えつゝあつた二日の夜から、鮮人の暴行、社會主義者の人心惑亂、其他一般の治安を害する言動に出るもの少くなかつ

たのと、此の大災害に際して罹災民を苦しむる奸商の輩出、私法上の金錢取引延期等に關する緊急勅令が發布されたのである。

次で十二日に至つて災民の救護と、帝都の復興とに關する大詔が煥發され、上下一致克く此の時難を排除すべきことを宣へさせ給ふた。

勅語

朕神聖ナル祖宗ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成績ニ鑑ミ皇考中興ノ宏謨ヲ繼承シテ肯テ愆ヲサラムコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ニ祖宗ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空前ノ大戦ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ

焉ツ圖ラム九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ潰倒男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リテ熾々天ニ冲シ京濱其ノ他ノ市邑一夜ニシテ焦土ト化ス此ノ間交通機關杜絶シ爲ニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其ノ慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較ブレハ寧ロ凄愴ナルヲ想知セシム

朕深ク自ラ戒慎シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人カヲ以テ豫防シ難ク只速ニ人爲ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫

レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜ヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保證ノ爲ニ多衆災民ノ安固ヲ脅スカ如キアラハ人心動搖シテ底止スル處ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂揚シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ道ヲ講セシメ先ツ焦眉ノ急ヲ拯ヒ以テ惠撫慈養ノ實ヲ舉ケント欲ス

抑々東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スル所ナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メスト雖依然トシテ我國都タルノ地位ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其ノ慶ニ頼ラムコトヲ切望スヘシ之ヲ慮ツテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノ事ヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬違算ナキヲ期セントス

在朝有司能ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民ノ救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ禁遏シ民心ヲ安定シ一般國民亦能ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕前古無比ノ天殃ニ際會シテ恤民ノ心愈々切ニ寢食爲ニ安カラス爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名 御璽
攝政 宮

大正十二年九月十二日

內閣總理大臣
各省大臣

なほ十一日を以て發布された輸入税免除に關する緊急勅令と、樞密院で審議された府縣會議員選舉延期の件及び災民減免税は左の通りである。

△勅令第四百七號 米穀法 第一條の規定に依り米穀の輸入税は大正十三年三月卅一日迄之を免除す

附則

本令は公布の日より之を施行す

△勅令第四百八號 大正九年勅令第五十三號中左の通り改正す大正十二年十一月卅日を「大正十三年三月卅一日」に改む

附則

本令は公布の日より之を斷行す

租税減免と木材輸入税

一、災害地（東京府、神奈川縣、千葉縣、埼玉縣、静岡縣）に於ける府縣會議員選舉延期の件

- 二、震災被害者に對する租税減免の件
- 三、建築材料の輸入税免除の件

二四

大地震の經過

今回の大地震に就て、中央氣象臺技師理學博士中村左衛門太郎氏が發表された所に依ると、左の通りである。

九月一日午前十一時五十八分四十四秒六に起つた烈震は安政以來の大震で區域は京濱及一帯の地強震の區域は西は丹後宮津、福井名古屋に及び東北は石の巻仙臺附近に達した京都大阪地方は弱震程度で勿論被害はない。

東京に於ける其後は強震は一日の烈震の餘震で三日午前四時までに人體に感じたもの大約七百回であつた、其後餘震も次第に減少して來たが、初震以來東京に於ける餘震數で（有感覺のもの）左の通りである。

- △九月一日 初震より午後六時まで百七十一回以上
- 午後六時より夜半迄五十一回
- △九月二日 夜半より午前六時まで五十三回
- 午前六時より正午まで八十一回
- 正午より午後六時まで八十六回
- 午後六時より夜半迄百〇三回
- △九月三日 夜半より午前六時まで六十四回

- 午前六時より正午まで三十六回
- 正午より午後六時まで四十二回
- 午後六時より夜半まで三十九回
- △九月四日 夜半より午前六時まで三十六回
- 午前六時より正午まで五十六回
- 正午より午後六時迄六十回
- 午後六時より夜半迄三十二回
- △九月五日 夜半より午前六時まで二十六回

尙ほ同氏は去る八日から驅逐艦『江風』に投乗して、相模灣、東京灣沖の地震中心地を視察し、九日から十日まで國富技師と共に相州三浦半島や、房總半島、伊豆半島等を詳細に視察して歸京し、十一日左の如き根據から今回の地震原因を發表された。

今回の地震は相模灘南西部に起りたる海底の陥落及其反動として相南地方、三浦半島、房總半島方面に於ける土地の隆起に因るものなり、右陥落は伊豆大島附近に於て約三四尋にして隆起は大磯附近に於て約三尋位なり（津浪はありたるも損害は輕微なり）地震に因る被害の激甚なるは厚木、平塚、藤澤、鎌倉、館山附近にして小田原附近も激しかりし如くなるも未だ踏査せず、横濱より東京に接近するに従つて被害減ず、各地に於ける初動は何れも外方に

向ひ陥落或は斷層地震たるを示せり今回の地震は其性質は元祿十六年十一月廿三日の地震に似たる點多し、當時房總地方土地隆起せる事今回と同様なり、但し震域は今回より少しく大なりしが如し、安政年間の地震は今回の地震と少しく性質を異にす（元祿十六年は地震の爲め寶永と年號を改めた）本邦の地震と臺灣の地震とは關係密接にして多少豫知的材料とするに足るが如くなるも今直に豫報的の言を爲すは無謀ならん、今回の地震は太平洋一帯の活動の一たる事明かなり又十一日正午までの餘震は二日正午まで（三五六）三日正午まで（二八九）四日正午まで（一七三）五日正午まで（一四八）六日正午まで（七八）七日正午まで（四六）八日正午まで（四三）九日正午まで（四三）九日正午まで（四二）十日正午まで（三二）十一日正午まで（一九）都合千二百二十四回であるが水戸に於ては九日までに有感覺地震一四四回あつたとの事である。

御遭難の宮家と名士

今回の大變災に際し、金枝玉邇の御身にて無殘の最後を遂げさせ給ふた御方には、山階宮妃佐紀子殿下、東久邇宮第二王子師正王殿下、閑院姫宮寛子女王殿下の御三方を數えまゐりますが、佐紀子殿下は鶴沼牧田氏別邸にて、師正王殿下寛子

女王殿下は小田原御別邸にて、何れも震災の爲めに薨去遊ばされた。又東京での知名の士は、磯部四郎博士が本所被服廠跡で焼死を遂げ、安田善雄氏一家は同區横綱の本邸で同じく焼死、又横濱では若尾幾造氏が同様焼死を遂げた外、多數の犠牲者を出してゐる筈だが、交通機關の停止や調査不能の爲めに明瞭を缺いてゐる。

尙ほ最後に尊き犠牲者の一人として特筆すべきは、奉所區二葉小學校長前澤誠助氏で、氏は震災の起ると同時に多數の小學生徒を被服廠跡に避難せしめ、御眞影奉安の爲め猛火の中に飛入りて最善を盡されたが、悲い哉遂に火焰に捲かれて學校と運命を共にし、輝かしい殉職の人となつてしまつた。此他相生警察署長山之内秀一氏西周警部補以下署員十六名も亦、共に尊むべき殉職の死を遂げられた。尙ほ東京府市の罹災小學校百十七校に奉安された御眞影や勅語謄本等は、當分の中宮内省に奉還することゝなつた。

東京市の慘死者

九月一日から三日黎明に至る間の震災と火震との爲め、震災を逃れた者も火災の爲めに家財道具は勿論、生命までも奪はれて罹災各區に無な慘る最後を遂げた人々は數えきれないほどである。左に掲ぐるのは東京市府民が此の大慘禍に犠牲

となつた數を、東京市役所と警視廳とで調査した、六日午後九時までの報告に基いて採算したものである。

本富士署管内四十五人▲築地同百五十人▲大崎同八人▲北船屋同三十四人▲
蓋谷同十人▲上野同四十五人▲扇橋同七百五十人▲島居坂同二十九人▲新堀
橋同六十五人▲谷中同三十一人▲淀橋同三十人▲駒込同六人▲愛宕同九十三
人▲麴町同二十人▲原庭同三千五百人▲千住同百人▲三田同百三十七人▲表
町同七十八人▲早稲田同九人▲寺島同三十三人▲久松同百三十人▲相生同四
千百九十九人 合計四萬七千二百九十三人

右の計算は六日迄の調査だが、其後十三日になつて市内の焼死者は七萬八千數百名、重傷者九千二百二十五名、輕傷者二萬八千四百八十名、行衛不明二十三萬二千二百八名に達したことが發表された。但し行衛不明中には、無論避難者の大部分が加はつてゐると見てよろしい。

火害負傷者無數

今回の震災火災に就て、負傷せし市民は十數萬を以て數ふる中に、警官の死傷約一千名に達してゐるそうである。中にも本所區相生署の山之内秀一署長、西岡警部補以下十六名は焼死し、八十餘名は行衛不明となつてゐるが、恐らくは其の大部分が焼死したものと推測されてゐる。

焼失した諸官廳

今回の地震と劫火の爲めに破壊又は焼失した官廳は左の通りである但しカッコ内は移轉先。

内閣法制局、賞勳局、恩給局、拓殖事務局、會計課、記録課(樞密院事務局内)、印刷局(衆議院事務局内)、内務省(内相官邸)、大藏省(日本興業俱樂部)、文部省(高等師範學校)農商務省(農相官邸)、逓信省(中央郵便局)、鐵道省(東京鐵道局内)、會計検査院(同院舊正門前)、警視廳(第一中學校内)

而して今回新に設けられた、臨時震災救護事務局は内相官邸に、關東或殿司令部は參謀本部内に置れてゐる。又警察署の焼失したのは左の通りである。

麹町署、錦町署、西神田署、外神田署、久松署、堀留署、新堀橋署、築地署、北船屋署、月島署、愛宕署、上野署、坂本署、泉涌署、日本堤署、南元町署、七軒署、相生署、大平署、原庭署、向島署、西平野署、扇橋署、洲崎署、水上署、小松川署(倒壊)

火災と其の原因

地震に火事はつきものだとは、昔から言ひ傳へられたばかりでなく、多くの事實を伴ふてゐることは、彼の安政の大地震や濃尾の大震災に徴しても知られるか、然し今回の地震ほど火災の慘禍が激甚だつたことは、日本は素より外國にも其の例を求め難い。筆者の實見した所に依てするも、第一回の

激震を去ること三十分の後には、淺草、下谷方面には既に三ヶ所の發火を見たのみか、一時間と経たぬ内に、京橋、日本橋、神田、本所、深川等に發した火は既に二十餘ヶ所を數え、多少の南風はあつたにせよ、火足の鋭さは譬ふるに物なきほどで、火焰は四方八方に舞ひ上り亂れ狂ふて、發火から五六時間の後である一日の夕刻には、満都殆んど火に包まれ、二百萬の市民は先を争ふて安全地帯に避難する次第であつた。勿論崩れる燃えるといふ諺もあることだから、敢て不思議はない上に、それ火事だといふ時分には水道は破壊されて一滴の水もなく、彼の有力な自動車ポンプも役に立たず、消防隊も手の下し様がなかつたから、火勢は刻々に猛威を加へ、第一師團と近衛師團とが出動して消防に努めても、遂に何等の効果を奏さなかつた。蓋し今回の火災は世にいふ劫火の比ひてあらう乎。

然るに二日朝來、誰いふとなく、今回の火災は不逞鮮人の放火であると宣傳しはじめた。二百萬市民は火の廻りの迅速なのと、發火の場所が多かつたのと、焼きたくも焼けないほどの大建築などが、手もなく炎々と燃え上る光景とを見てゐるので、所謂思ひ半ばに過るの感を懐いた。そして時間の経つに従つて此の風説は益々有力となり、或は横濱地方を荒した鮮人が數百名東京に入り込んで、到る所に爆弾を投ずる

と云ひ、又はガソリンをかけて火を放つといふ。既に下町全部と山の手の樞要部とを焼き拂はれ、僅に残れる牛込、小石川、本郷、四谷、赤坂、麻布、麴町など殘餘の市内に居住する市民は、茲に至つて非常な疑懼と恐怖との念に囚はれて、人々安き心もなく、戦々兢兢たる有様なので、如上各區の在郷軍人、青年團及び、各町の男兒は一齊に起ちて自警團を組織し、各自に町内の警護に任じ、軍隊、警察亦力を合せて嚴重取締を勵行した。

戒嚴令と鮮人逮捕

不逞鮮人放火の説盛んなる折柄、風説は又もや傳はつた、それは彼等が東京市民の唯一な飲料として頼む井水に毒藥を投げ入れるといふことで、之が爲めに牛込方面では非常の死を遂げたものも少なからぬとの話である。放火と毒藥投入とが實際か風説かは別問題として、地震は當時も尙ほ頻々襲來しつゝあるのだから、人は何れも風聲鶴唳に驚かされ、帝都の治安は相當に脅かされた。是に於て乎戒嚴令は二日を以て東京府と神奈川縣とに施行され、市内の秩序は漸次回復の運びに向ひ、同時に多數の舉動不審な鮮人や、社會主義者等が檢舉されたといふことだ。

東京市内の秩序が回復されつゝあると同時に、市民の敵愾

心は極度に緊張し、假令風説の鮮人放火團が實在するとしても、到底手を下すことが出来ない状態になつた一方、食料の不足は頓て飢饉の恐れを伴ふので、帝都に充滿してゐた罹災者は續々として府下又は地方に去る。此の群集の中には所謂不逞鮮人も普通の鮮人もあつたであらうし、又社會主義者もあつたであらう従て都下の騷擾と不安とは、府下と地方とに移動した形があり、地方各自の警戒となつたから、四日には埼玉、千葉兩縣下でも戒嚴令を布かれ、極力治安の維持に努力された結果、民情漸く安堵することを得た。

軍隊配置と兵力

關東戒嚴司令部から發表された所に依ると、各師團から派遣された、部隊は六日中に全部到着したので、七日左の如き新配置につかせられた。

東京北半部 近衛師團の大部、第十三、第十四師團の歩兵三聯隊、工兵第二第八大隊、第二、第三、第十三師團の衛生隊
 東京南半部 第一師團の大部、第二、第十四師團の歩兵三聯隊、工兵第十三大隊、第八、第九、第十四師團の衛生隊
 神奈川方面 第一師團の歩兵一聯隊、騎兵一中隊、工兵第十六大隊
 藤澤方面 第一師團の歩兵一聯隊、騎兵一中隊、工兵第十六大隊
 小田原方面 第十五師團の派遣部隊、三島重砲兵旅團の一部、工兵第十五大隊、第十五師團救護班
 神戶道方面 第二師團の歩兵一聯隊、近衛騎兵一中隊

右の外市川、船橋、千葉、佐倉方面は、各地殘留部隊を以て警備に充てられてゐるから、確實に治安の保持が出来る。

官憲の物資蒐集

震災火災相踵て勃發し、東京市に於ける物資の大部分は燬滅せる有様なので、百五十萬の罹災者は、忽ち其の日の生活に困難を感じ、アツヤ飢饉の襲ふ所とならんとしたので、當局官憲は帝都の安寧秩序を回復保持すると同時に、茲に食料の蒐集に努力し、無線電信、飛行機等を利用して各地と通信聯絡を保ち、一週日の後には各地より數十萬石の玄白米を移入した外、政府は更に帝國の聯合艦隊を出動せしめて、糧食の大輸送を計畫したから、今後の東京市は食料に窮する如きことは、萬々之れなきこととなつた。

避難者收容のバラック

震災火災の爲に住むべき家屋と、食ふべき糧食とを失ふた多數の罹災者中、七八十萬人は既に帝都を去て地方に避難したが、今尙ほ帝都に留つて各方面に避難してゐる罹災者も、矢張り七八十萬人を算するので、政府は目下是等罹災者を收容すべきバラック式家屋の建築に着手してゐる。そして攝政宮殿下は、雨霖に打れ飢饉に迫れる多數の市民に深厚な同情を寄せ給ひ、上野公園、芝公園、淺草公園、宮城前廣場其他

適當な場所に於て、十萬人を收容し得べきテント張のバラックを建築せしめられつゝある。そして其の材料たる木材は皇室の御料を御下賜あり、テントは陸軍より一旦殿下に献納し殿下より更に東京市に御下賜相成る趣きだから、國民たるも此の優渥なる皇恩を忘却せぬ心掛がなくてはならぬ。

焼残つた三大寺

今回の大災害たる地震と劫火の爲めに、都下の凡有ゆる大建築物は數を盡して崩壊焼滅、さしもに華美を競ふたる花の都も、三百餘年の文明を擧げて灰燼に歸してしまい、見渡す限り荒寥慘澹たる瓦礫場と化した中に、芝の増上寺、上野の寛永寺、淺草の淺草寺だけが、幾百千を以て算する神社佛閣中に不思議にも焼残り、法燈長なへに東海の天に輝かんとする。中にも淺草の觀音堂即ち金龍山淺草寺は、地元たる公園六區から出た火先と、吉原遊廓から延焼した火先と、橋場、今戸方面を焼き盡した火先とが猛烈に焼き立て、西は新谷町、北は千束町、東は馬道、花川戸、南は廣小路附近一帯が僅々數時間の中に焼滅した中に、淺草の觀音堂と五重塔、舊三社様と稱えた淺草神社其他の附屬建物が、悉く紅蓮の火焰を免れて無事の姿を末代に残したのは、所謂觀音經の「念彼觀音力猛火不能燒」の神通力に依るものか、何れにしても

不可思議千萬の大奇蹟たるのみでなく、此の寺院の境内に避難してゐた數萬の同胞も、其の大部分は生命を全ふしてゐる次第である。此の觀音堂は人も知る如く今を去ること一千二百餘年前の草創に成り、堂宇回祿の災に罹ること前後九回、而も本尊たる觀世音大士の尊像は常に無事なることを得たといはれる。殊に彼の安政の大地震と火災とは、嘗に本尊のみでなく、本堂も五重塔も焼滅を免れ來り、今回更に安政以上の大慘禍に遭遇しながら、依然として其の面目を保てるは實に廣大無量の法力といふ外はない。此他増上寺、寛永寺等何れも奇蹟的に回祿の災禍を免れ得たのは喜ばしい。

東京市の損害程度

然らば此の大災害の爲めに、東京市は抑も如何程の損害を強ひられたのか、人の生命は金錢に見積ることが出來ぬので、此の損害は別問題として、今回の災害が残していつた財産上の損害は、實に容易な譯のものでない。今政府筋の調査に成れる推算に基くと、焼失した建築物のみの損害でも、三十五億圓の巨額に上ると言はれ、之に商品や工業原料其他有ゆる有價物を積算したら、其の總額は實に莫大な數字を示すであらう。之に就て世間で推算するものは或は、五十億と言ひ、百億と言ひ、又は二百億の損害だと主張するものもある。然

し是等とても素より正確な根據がある譯でないのだから、實際の損害は正確に測定する譯にゆくまゐ。只大づかみなところて全損害を百億と見れば、大した遺算もあるまい乎。

然し口でこそ百億の損害といふが、之を回復するには幾年の歳月を要するだらう。明治元年の四月徳川氏から江戸の城市を受取つて以來、其の體面即ち、舊江戸の面影を一變して新たなる東京市を建造するまでには多數の歳月を要してゐる勿論それは一舉にして變更する必要のなかつたわけ、徐々改築改造の手段を執られたが、其の間の年数は四十餘年を費したてはないか、而も是等の時代は日本の財政が年を追ふて膨脹し、日清戦後の最好況時を活躍の初めとし、歐洲戦時に至るまでの間は、時に財界の不況に遭遇したこともあるが、機運は概して向上し、國家の富力が増進しつゝあつたので、何人も負擔の重きに苦痛を叫ぶほどではなかつた。然るに今回の災害は所謂る不景氣のドン底に突發し、三百年の文明と歴史とを擧げて灰燼に歸した譯だから、之を恢復するには先づ民力の充實を圖つて後ならては、到底大帝國の首都たる體面を實現することゝは思われぬ、此の理由からすれば、東京市は今後十年にして、輪晝を造り更に十年にして内容を整え、然る後始めて新面目を躍如たらしむるに至るであらう。其の前途や蓋し遼遠と言はねばならぬ。

帝都復興會議

東京市の復興は極めて遼遠なことではあるが、國家の體面上からしても一國の首都たる東京を、廢殘のまゝに捨置く譯にはゆかないといふ見地から、餘燼なほ消えやらぬ九月九日の午前十時から、東京實業組合聯合會の重立者たる、澁澤子爵、山科禮藏、杉原榮三郎、星野錫、指田義雄、矢野恒太、大川平三郎、大倉男爵、二神駿吉、佐々木勇之進、神田錦藏、小池國三、石塚英藏、和田豊治、藤原銀次郎、川崎八右衛門(代理)、馬越恭平、淺野惣一郎、市來乙彦、團隊磨、大橋新太郎、小野英二郎、古河虎之助、中川小十郎其他の諸氏が會合し、澁澤氏を議長として協議を重ねた結果、大倉男は大都市の建設には、第一に交通を考慮すべきことを説き、和田豊治氏は罹災者の救済を主専とし、之には委員會設置の必要がある、其の委員には實業家のみならず災廣く政治家方面をも網羅すべきを説き、指田義雄氏は大東京建設には築港の關係から、横濱方面とも交渉の必要ありと主張し、淺野惣一郎氏亦帝都復興策に就て意見を縷述し、結局此の問題は之に干與する人々の範圍を擴げ、貴衆兩院にも諮つて救済策其他を攻究する必要ありと決し、同日出席してゐた河合貴族院書記官長とも相談の上、澁澤子爵、貴衆兩院議長三名で、政治家、實

業家の兩方面から委員を選出し、先づ第一に委員會の名稱を定めてのち、大東京復興、罹災民救済に關する諸問題、即ち金融、保險、東京の中心地、市街區の體裁等を協議することに決定したが、十二日緊急東京市會協議會が開催され、永田市長から東京市復興策に關する左の如き決議草案を參考として提出され、協議の結果十九名の委員附託となつた。

東京市復興策決議草案

- 一、遺般の大災害に鑑み今後帝都として政治の中心地として將又商工業の府として完備安全なる東京市の再築を期する爲め左記に關する大方針を樹立し市民をして速に其適從する所を知らしめられたきこと
 - 一、路線の擴張
 - 一、大公園の設置場所
 - 一、住宅、商業、工業、各地域の設定
 - 一、食品市場の設置場所
 - 一、其他都市建設上必要なる事項
 - 一、火災保險金の支拂は全部拂戻の方針として之を行ひ罹災者をして速かに回復の途に就かしめられたきこと
 - 一、政府は銀行業者を監督且つ援助し料金の拂戻をなさしむる方針を決せられ其成果顯著なるものあるも右は一層徹底

的に之を執行せられ以て復興資源をして涸竭せしめられざる様十全の方法を講ぜられたきこと

- 一、政府は本市復興財源の一部として本市内に於ける官有地一切を舉げて本市に無料交付せられたきこと
- 一、從來本市内所在の諸官衙學校等にして比較的市内に存置を必要とせざるものは此際努めて郊外に移轉する舉に出でられたきこと
- 一、從來本市に本店を有する會社個人等の商工業者をして政府及び市は出來得る限り本市に止まり事業を繼續せしむる様便宜を與へられたきこと
- 一、從來の本市住民中老幼婦女を除くの外復興の原動力となるべきものは可及的之を本市に止むるの方法を採り依つて以て本市の復興をして速かならしむべく最善の努力を拂はれたきこと
- 一、市は此際東京市復興に關する愛市公債を募集し之を財源として個人所有の土地を買收し本市再建に關し土地の市有を實行せられたきこと
- 一、市は一定の地域を劃し中流以下の市民の爲め市營住宅を建設するの途を講ぜられたきこと
- 一、燒失跡の整理は市に於て一手に之を執行するの方針を執り其努力は罹災民中生業を失ひたるものに之を雷め一舉に

して救済と整理の實を購ぜられたきこと

一、大災害に依り一舉にして財産を失ひ骨肉を奪はれたる等の爲め罹災民中動もすれば自暴自棄に陥るの虞なしとせず此際政府及び市は思想の善導を策すると共に此機に乗じ反國家的過激思想の撲滅を期し斯る主義主張の宣傳實行を爲すものに對しては峻嚴なる取締をせられたきこと

一、政府は帝都復興に關する一省を設け專任大臣を置き徹底的に本市復興の事に膺られをきこと

尙ほ帝都復興に關する政府の方針は、此の機會を利用して商、工業、住宅の地域を區割して、道路の擴張改正、地下埋設物の徹底的整理、大公園の新設、絶對的耐火耐震の家屋建築をなすこととて、是には個人的建築物にも政府の補助を含め東京横濱で約百億圓を要する見込と言ふが、或は其の半額位に止めるかも知れぬ。何れにしても此の財源は歐米市場で東京復興債を募集する外あるまいが、之に就て屢々緊急勅令を發布するべからうとの事である。

災民救護と善後會

帝都其他に於ける大震災と同時に、逸早く外櫻田町の内務大臣官邸に設置された、臨時震災救護事務局では、左の如き各部委員を決定して、直に救護事務を執掌した。

- △總務部(官邸玄關) 三谷宮松、赤木朝治其他
- △情報部(同ベランダ) 長岡隆一郎、次田大三郎
- △食糧部(同應接間) 潮惠之輔、田中政明其他
- △諸材料部(同上) 田子一民、真島健一郎、中井駒作其他
- △運輸交通通信連絡部(同食堂) 長谷川久一、河原田稼吉
- △飲料水部(同上) 長谷川久一、横山助成、田中政明其他
- △衛生醫療部(同上) 横山助成、山田弘俊、鈴木裕之
- △警備部(同日本間) 後藤文夫、畑英太郎其他
- △收容設備部(同食堂) 山内準次郎、長岡隆一郎(兼)、潮惠之輔(兼)、田子一民(兼)其他
- △會計經理部(同ベランダ) 堀切善次郎、田昌

次には大震災善後會であるが、是れ亦十一時商業會議所で委員總會を開き、徳川貴族院議長、粗谷衆議院議長、澁澤子爵以下委員五十名出席して、罹災者の救済や東京の經濟組織復活に關して、左の如き規約を作製決定し、會長に徳川家達公副會頭に澁澤榮一子、粕谷義三、山科禮三の三氏を選び、徳川會長から左記二十四名の常務委員を指名した上、直に常務委員會を開き、大體の打合せをなしたから、着々として今後には實効を擧るべからう。

善後會規約

- 第一條 本會は大震災善後會と稱す
- 第二條 本會の事務所は之を東京商業會議所内に置く
- 第三條 本會は大正大震災の救済をなし及經濟復興に關する必要なる施設を攻究するを以て目的とす
- 第四條 本會は大震災救済の爲め有志者の寄附を受く
- 第五條 本會に左の役員を置く
- △會長一名△副會長三名△委員若干名△協議員若干名幹事若干名
- 第六條 會長及び副會長は發起人に於て之を推舉す委員協議員及び幹事は會長之を囑託す
- 第七條 會長は本會一切の事務を統轄し委員會及協議員會議長となり本會を代表す△副會長は會長を補佐し會長事故あるときは之を代理す△委員は本會の重要本務を議決す但會長は委員若干名を指名し常務を處理せしむることを得△協議會は會長の諮問に應じ協議に參與す△幹事は書記以下を指揮して事務を處理す
- 第八條 本會の議事は出席員の過半数を以て決す
- 第九條 本會の經費は寄附金及び雜收入を以て之に充つ
- 第十條 會務の経過及び收支決算は別に之を報告す
- 第十一條 本會は所期の目的を達したる後解散す

横濱市の大災害

東京市に於ける地震と劫火とは敍上した通りだが、横濱市は震源地に近いだけ、震動も一層激甚であつたと傳へられ、大廈高樓の崩壊するもの數ふるに暇なく、慘澹たる光景名状すべからざるが中に、劫火は四方八方に起り、本牧、根岸、磯子、大岡附近、中村町市營住宅、一本松水道裏、久保山、神奈川臺、淺間町、反町、輕井澤等の一部分を残せるのみで他は全部烏有に歸した、されば市民は前記の安全地帯と、港内の船舶、平沼方面の河川に繋げる筏に向つて殺倒避難し、誰一人消防に盡さんとするものがなかつたので、火は燃えるがまゝに打まかせ、延焼又延焼、紅蓮の焔は天を焦し地を焼いて、さしも横洋有數を以て誇つてゐた横濱も、二日の正午頃には一望暗澹たる瓦礫場と化し、累々たる慘死者の遺體を以て滿された。然るに此の日、誰言ふとなく前日解放された囚人と不逞鮮人とが來襲するとの噂傳はり。さらても震災火災に恐怖したる避難民は、一層不安の念を高め、薄暮頃より青年團員、在郷軍人の多數は武器を執て警護の任に當ることゝなつた。かゝる間にも激震は斷續として大地を震はし市民を脅威すること一方でない。

三日は朝來地震も勢力衰えて、火災も全く鎮まつたが、鮮

人の來襲、暴行等の風説は愈々高く、中には強姦、殺人等の恐るべき事實ありと宣傳的に報道するもの少なからぬのみか放火其他の罪惡は認め得べき事實もあつたので、遂に自衛的見地から暴行者掃蕩差支えなしとの布告すら出て、青年團員は中學校から器械を取出し、赤布を腕章として山と川の合言葉を約し、徹夜警戒を嚴にした一方、海軍陸戰隊は春日、五十鈴等て來着した、而も其の警戒區域は一少局部に過ぎなかつた。こんな次第で横濱の秩序や安寧は相當に破壊され、一時的無警察の状態に陥つたので、鮮人ならざる不逞の徒は、白晝公然盜賊行爲を働き、燒跡の金庫さを掠奪せんと試むるものがあつた結果、四日に至つて遂に戒嚴令が施行され、奥原少將の引卒せる歩兵一個聯隊、騎兵一個中隊、工兵大隊等が配置さるゝこととなり、群馬縣から二百名の警官も來着し、尙又名古屋からは郵便局員が五名、青年團員と共に來着し、京濱間通信機關の復舊工事に着手した。

斯くの如くして殘骸的な横濱の秩序も漸次回復され、市民も亦聊か安堵する所があつたが、宿舍と食料との不足は新たな脅威を災民の上に加ふることとなつたので、横濱ドックの倉庫中なる米は配給のために解放され、更に各地からの同情で糧食の補給も始まり、民情一先づ鎮靜に赴いた。今參考として神奈川縣知事から内務大臣に宛た報告書を掲載すると

左の通り。

本月一日の震災は全市火の海と化し市民の若干は身を以て難を免れ其の慘禍たるや夢想だもすることの出来ない悲惨事で、一瞬にして天空冥蒙、骨肉相分れ、死生を異にするが如き状態である、然も全市の震災は時恰も陰曆の二十日の際日に際會し、烈風火を吹き、火焔瞬時にして全市に擴大し避難民は殆ど行處を知らぬ有様である依つて身を以て難を免れた當廳員を以て臨時救護所を横濱公園に設け警察部長は部員巡查をして各署長に非番巡查の非常召集を命じたが公園集合地に集まるに先だら既に諸所に發生した震火は交通を杜絶し集合自由ならず。然も餘震は絶えず繼續し揮發物爆發物は巨弾を放つが如き音響を發し空中に爆發し彈管飛散し殆ど戦争の如き状態を呈し、爲めに人心恟々として死生を知らぬやうな不安の間に夜を徹し警察官も亦殆ど不意の天災で、如何とも手の施すべき手段なく、辛うじて警察官を以て避難民の保護警戒、負傷者の手當を施したが、材料及醫師に乏しく遺憾の間に天明を待つ當夜の市民は附近の公園廣場、又は高所を選び避難した、即ち市公園に約五萬、掃頭山伊勢山に約一萬、本牧三景園附近磯子久保山等に約一萬づゝあり、其の後先を争つて適所に難を避けたものも少くなかつたが煙に巻かれ、熱さに堪へずし

て海中に飛込み溺死したのも少くない、その惨状真に筆紙に盡し難く、其の被害程度の如きも未だ調査することが出来ぬが戸數八萬五千中殆ど九分焼失又は倒潰死者約十萬負傷者は蓋し無數であらうと思はれる。

然し其後横濱市で取調べられた結果に依ると各警察署管内の死者は左の通りである。

▲伊勢佐木署 住民七萬四千六百五十五人、死者一萬二千五百五十三人、負傷者二萬四百四十九人

▲加賀町署 住民八萬四千六百六十八人、死者四千八百九十人、負傷者七千八百七十人

▲壽町署 住民六萬九千八百八十二人、死者二千三百六十八人、負傷者三千四百六十八人

▲戸部署 住民十萬八千人、死者二千七百七十九人、負傷者三千九百九十九人

▲山手本町署 住民六萬人、死者七千七百六十九人、負傷者千四百六十四人

▲水上署 住民六千人、死者千二百八十人、負傷者七百七十人

▲神奈川署 住民三萬二千六百六十五人、死者百三十二人、負傷者三千八百八十八人

合計 住民 四十三萬四千七百七十人

死者 三萬七百七十一人

負傷 四萬一千九百八十八人

なほ横濱市を除いた神奈川縣下の死傷、家屋の被害は左の如くである。

▲横須賀 死者四百五十人、負傷八百人、行方不明二百人

▲川崎 死者二百五十名、負傷者八百名

▲鶴見 死者三十七名、負傷者百四十四名

▲小田原 死者千三百八十一名、負傷者千五百餘名、其他の

町村の死者負傷を合する

郡部の總合計

死者 四千三百三十一人

負傷 二萬三千八百八十三人

行方不明 三百五十三人

又焼失家屋五萬三千三百七十六戸、浸水家屋四千四百九十九、半潰れ又は半焼二萬二千四百八十五戸

右の外神奈川以東、東海道沿道の神奈川九番町全部と柳町一部、富屋町附近全部、神奈川千若町、浦島町、海岸通入江橋以東も悉く焼失した。

焼残の場所と建物

横濱の大災害で兎も角無事に焼け残つた場所は

神奈川から東神奈川高臺一帯△久保山の奥の方半分△中村

町市營住宅一帯と中村町山手の根本通り△光明寺井戸ヶ谷とまいたの井戸ヶ谷附近△磯子の南半分△本牧岸奥一帯△新子安△山手外へ居留地の海岸より△神奈川警察

品川、大森の惨害多大

品川、大森以西の一帯は幸に火災を免れたが、震災の害は甚だしく、品川管内では(大井町を含む)発電所を始め全潰五十棟、半壊百餘棟で即死者二十五名、重傷者三十五名、輕傷者七十四名を數へてゐるが、この中発電所で七名、眞崎、市川鉛筆工場で五名、東京毛織會社で十一名の壓死者を出し、同工場では他に十九名の重輕傷者を出してゐる、品川役場では品海病院、長徳寺及び品川、大井兩役場内を救護所に宛て是等の罹災者を收容して居るが、警視廳でも品川病院内に救護所を設け、長野縣上伊那郡の醫師會から派遣された中川博賢氏外醫士四名助手九名で活動しつゝある、大森では矢口發電所、池上變電所、羽田役場、瓦斯電氣工場、黒澤工場等全潰五百七棟半潰千三百十棟で、即死二名、重輕傷五十七名を出してゐる、大崎では地震と同時に陸軍衛生材料置場並に同試験室より發火、同所二十餘棟の大建築を瞬間に焼拂つて、火の手は長者丸に延焼し二十六戸を舐めつくして鎮火、幸ひに即死者を出さなかつたが輕傷者七十名を出してゐる、全焼

家屋は藤原電線工場、本城鐵工場等四十七棟で半潰れが五十二棟、屋根を落したものの壁を壊したものは數へる暇がない、救護所は管内四小學校の校舍全部をこれに宛る外、三條公別荘、島津公別荘も開放され罹災者はいづれも同所へ收容されてゐる。

鎌倉も亦殆ど全滅

鎌倉町は地震と同時に大通りは殆ど一軒も餘さず倒壊、鎌倉病院の如きは入院患者の中逃た者は傳染病患者僅數名に過ぎず他は悉く下敷となつて死亡したが、長谷三橋旅館も又崩解し客と家人二十餘名の死者を出し殆ど同時に火を發して八幡前停車場前の火の手と共に長谷、大町、小町通りを烏有に歸した。焼け残つたのは僅に鎌倉劇場附近一丁ばかりの處で鶴岡八幡は石段下まで焼き、大佛は拜殿全部倒壊、長谷觀音、權五郎社、海濱ホテルは助かつた、此の外焼失した重なる建物は小町園、郵便局、町役場、停車場、警察等で、幸ひ火を免れた海岸側の別荘は何れも倒壊した上、海嘯に襲はれ、避客の大半は沖に流され溺死した、尙材木座は出火しなかつたが海嘯に吞まれ完全なる家は一軒もなく、土地の龜裂八寸餘に及んだ、島津公其他の別荘は何れも倒壊した。

小田原方面の被害

一日の激震は小田原町に於ても猛威を揮ひ、全町五千戸中千七百戸は倒壊し、三千三百餘戸は焼失し、死者二百三十餘名負傷者五百餘名を出した程で、御用邸、閑院宮御別荘等を始め、町内の重なる官公衙其他、大抵崩壊の災厄に遭遇した。又小田原町を除いた足柄下郡内に於ける家屋の倒壊は一萬二千に上り、死者は千二百、傷者は千五百に達したと言はれる此他厚木、秦野、松田、大磯、箱根等にも、非常の損害が加えられたが、其等の程度は今尙ほ詳細に知ることが出来ぬ。

横須賀の被害絶大

横須賀に於ける震災の惨烈であつたことは、實に言語に絶する有様で、最初の激震が一たび訪問するや、家屋といふ家は非常なる音響をあげて一時に倒壊し、電柱の如きさへ其の大部分は地上に横はり、濼々たる烟塵之を掩ふて凄惨の氣満市に溢れ、續いて炎々たる猛火は市の八方より燃え上り機關學校、兵學校等の如き大建築も瞬く暇に火焰に包まれた一方、重油タンクが爆發して一面の火の海となり、叫喚大呻の焦熱地獄を出現したが、何を言ふにも瞬間の出来事なので、壓死するもの焼死するもの少なからず、僅々五六時間の後には市の大部分は灰燼に歸してしまつた。又第一回激震當

時は恰ど汽車が着いた少し後で、プラットホームから吐き出された乗客の多くと他の通行人とは、市に通ずる路上の崖崩れて大抵生理となり、今尙ほ生死不明になつてゐる。又某小學校の如きも全生徒が校舎の下敷とはり、多大の死者を出してゐるが、詳細な家屋人命等の損害は、今なほ明白に知ることが出来ぬ。因に崖崩の爲めに埋没せるものの中には、各府縣から見學に來た女學生五十餘名も含まれてゐると見做されてゐる。

又程ヶ谷では全潰家屋四千戸、半潰二千戸で、死者は三百名、負傷者は三千名、行衛不明が四名であるが、激震當時町民は岩間山、神戸山等に避難した。平塚では相模紡績が全潰して社長日比配長太郎氏以下二百餘名慘死した外、小學校、平塚銀行其他多數の倒壊家屋を出したる上、海軍火藥庫が破裂したので火災を起した結果、震死焼死を合せて約四百名に達したといはれる。此他地震の爲めに著るしい變動の起つたのは大磯で、海面一帯干涸となり、六尺餘も地盤が高まつたさうである。尙ほ神奈川縣下郡部と横須賀市の被害は左の如くである。

郡名	全潰戸數	燒失	死者	傷者
横須賀	一四、三〇〇	四、〇〇〇	四五〇	二、〇〇〇
横樹郡	三、七三四	二	三五二	一、二五四
久良岐	九八七	一	九八	四〇〇

都築郡	三三一	三	一五	一二
鎌倉郡	七、一四三	一、〇一八	五九八	二、四八三
三浦郡	六、一三五	三一四	六一〇	四、二九七
高座郡	六、九四三	五	三九八	五九二
中郡	一一、〇六〇	四一七	七一六	一、二五三
津久井	五三	：	五三	二
愛甲郡	一、九〇二	二三三	五六	二〇一
足柄上	二、一四八	七	一八九	一六一
足柄下	一一、八三七	四、一四九	一、三八一	一〇、二七三
計	七五、七一一	一〇、四〇九	四、九八	二一、九二八

右の外半潰戸数は二萬九千七百二十戸に達してゐる。

伊豆方面の被害

今回の大地震は伊豆大島の沖合を震源地とすると言はれた結果、大島は勿論、熱海、伊東、修禪寺其他の温泉場は全滅と見られてゐたが、不思議にも其の大島には輕微な被害があつたのみで、三原山にも異状がなく、三宅島、利島、新島等も殆んど無事だと傳へられ、南伊豆地方の稻取は屋根瓦の落下せる程度であり、海嘯とても一般に注意警戒が行届いた結果、流失二十一戸を出したのみで人畜に死傷なく、下田は家屋の全壊一戸と半壊二戸で無論死傷なく、唯船舶の破壊が百二十艘に及んでゐる。又長津呂、港等は殆んど安全で何等の被害がない、それから三島町であるが、是とても家根瓦落下

位の被害といふから、熱海、伊東方面も或は存外輕微の被害であるかも知れぬ。只熱海鐵道が破壊されたので、詳細なことを知り得ぬのは實に遺憾だが、伊豆山は全滅と云ふ。

千葉縣下の被害

千葉縣下に於ける今回の震災被害に就ては、去る八日同縣保安課で左の通り發表してゐる。
死者千百名、傷者三千二百九十八名、全潰家屋一萬五千五十七戸、半壊四千六百三十二戸

右は勿論全縣下を通じた被害の全數であるが、最も激甚であつた地方は、那古、北條、館山、鴨川、勝山方面で、家屋の倒壊は言ふに及ばず、壓死者負傷者極めて多く、勝山沖の浮島は二つに裂け、鋸山は崩れ落ちて海面を埋めるほどの慘害を呈し、此の方面にも家屋人畜の被害尠くなかつた、又湊、大貫、佐貫、木更津等も多大の被害があつて、家屋は半數を失ひ、數百の人命を犠牲にした。

埼玉縣下の被害

埼玉縣に於ける震災は、房總地方の如く激甚ではなかつたが、然し被害が相當に出てゐる所を見ると、亦是れ尋常普通の地震でなかつたことを看取することが出来るのである。今

縣常局の調査になつた報告を示すと左の通りである。

埼玉縣に於ける被害は死者二百十二人負傷者三百七十九人
家屋の全潰五千七百六十六、半潰四千二百三十七二日から六日
までに醫療人員は六千六百六十七人である、被害は北足立、
入間、北葛飾、南埼玉等に亘り、北足立最も甚だしく、大里、
比企、秩父、兒玉方面は無事、一時秩父山脈中に爆發の噂が
立つたが、跡方もない風説であつた。

最初の暴利令違反者

今回の大變災に際しては、畏くも上は今上陛下を首めまゐ
らせ、皇太子殿下も優渥なる御沙汰を賜はりて、官憲は勿論
國內に於ける富豪其他が自家の損害を度外にをき、専念災民
の救護に最善の努力を敢てし、歐米各國も亦或は義金を募り
或は救護班を組織して、一意我國の災害を救助する所あらん
とし、勞農露國、中華民國に至るまで、官民一致して以て憐
むべき我が罹災者を慰藉するに汲々としてゐる、特に中華民
國の如きは、東京の大地震大火災を聞知するや、言合せたる
如く昨日までの排日ボイコットを中止して義金の募集、救護
の手段に最善を盡し、七千萬同胞をして人情風俗を異にする
海外人の深厚なる同情に泣かしむる今日、同じ日本帝國臣民
にて同じ帝都の土に住みながら、不幸なる罹災者を捉へて自

家利益の標的となし、不當の暴利を貪りて罹災者の咽喉を扼
する如き不善の行動に出て、永く醜名を社會上に留めんとす
るもの少なからぬは慨すべしである。而して第一回到當局の
爲めに檢舉された奸商等は左の通りです。

▲牛込區納戸町三三金物商米津屋米津六太郎▲同區下宮比町酒商飯田屋事
原島政五郎▲麹町區中六番町六の四乾物商磯部五太郎はクズ粉一圓二十五錢
のものを二圓▲同三番町六四米商林義雄は白米一升五十五錢▲同飯田町二の
五〇酒商萬六商店渡邊六兵衛は醬油二升を金四圓▲赤坂青山六丁目材水商西
村定吉は四分板七圓を九圓其他四圓の品を七圓▲牛込山吹町一三八金物商君
島吉之助は七十錢のバックを一圓八十錢▲四谷新宿一の二二乾物商水野銀次
郎はロケット一本二錢を五錢五厘或は六錢▲四谷傳馬町三の三一乾物商杉本
勝平は襪飾一本一圓を二圓▲浅草高原町杉本金藏及び埼玉縣生れ森田安兵衛
は共謀して三輪一二番地先の道路で白米一升を九十錢▲西巢鴨三二四四細
田泰治は玄米一升を六十錢▲高田練河ヶ谷金子孫兵衛はロケット二錢を五錢

其他赤坂表町署管内で白米商二名菓子商二名青物商四軒煙草
商一軒飲食店一軒、下谷坂本署管内で米屋酒屋飲食店四軒何
れも現行犯として檢舉されたが尙當局では此際犯罪は情に於
て甚だ憎むべきものだから嚴重に檢舉する方針であるとのこ
と。

東京の焼失面積 (單位方里)

今回の火災に就て陸地測量部が調査した結果を示すと左の
通りである。

区分	全面積	焼失面積	不焼失面積	焼失歩合
麹町區	〇、五二九〇	〇、一七四	〇、四一一六	〇、二二
神田區	〇、一九九三	〇、一八七一	〇、〇一二二	〇、九四
日本橋區	〇、一九二二	〇、一九二二	：	一、〇〇
京橋區	〇、二九四七	〇、二五三二	〇、〇四一五	〇、八六
芝區	〇、六〇八八	〇、一四五〇	〇、四六三八	〇、二四
赤坂區	〇、二七四〇	〇、〇一九八	〇、二五四二	〇、〇七
麻布區	〇、二五七五	〇、〇〇〇一	〇、二五七四	〇、〇〇
四谷區	〇、一七九七	〇、〇〇三九	〇、一七五八	〇、〇〇
牛込區	〇、三三七九	〇、〇〇〇二	〇、三三七七	〇、〇〇
小石川區	〇、四二一一	〇、〇一七二	〇、四〇三九	〇、〇四
本郷區	〇、三一三〇	〇、〇五五二	〇、二五七八	〇、一八
下谷區	〇、三二七一	〇、一五六〇	〇、一七一	〇、四八
澁草區	〇、三一七一	〇、二九九一	〇、〇一二六	〇、九六
本所區	〇、三九四〇	〇、三七三四	〇、〇二〇六	〇、九五
深川區	〇、五〇五八	〇、四二七七	〇、〇七八一	〇、八五
計	五、一四五八	二、二四七五	二、八九八三	〇、四四

(備考) 本面積には隅田川及び新橋御蔭に屬する面積は含有せず

災後の東京人口 (十一日現在)

臨時震災救護事務局が調査した、九月十一日現在の人口及び災前の人口は左の通り。

區名	震災前人口	震災人口	避難者	現在人口
麹町	六三、八一七	一一、五六〇	三八、〇四七	八九、三〇四
神田	一六七、〇四六	一五七、一四九	二〇、〇〇〇	二九、八五七
日本橋	一五三、一九二	一五三、一九二	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇

京橋	一六〇、七五一	一五九、八九〇	三〇、〇〇〇	三〇、八六一
芝	二、一八四、五一七	七二、四二九	五三、三一	一九九、三九九
麻布	九七、三五六	：	三八、九一七	一三六、二七三
赤坂	七〇、〇三三	一六、七八七	一八、〇〇〇	七一、四六
四谷	八五、三七六	六、四九四	三三、六三七	一一二、五一九
牛込	一三八、二三一	：	七三、八二九	一一二、〇六〇
小石川	一七八、四八一	四、四三二	九五、六九〇	二六九、七三九
本郷	一五一、四九九	三〇、〇三五	八八、四六八	二〇九、九三二
下谷	二一八、六五三	一七一、九八六	七五、四二七	一一二、〇九四
澁草	二九四、一四七	二九四、一四六	一一五、〇〇〇	一一五、〇〇〇
本所	二九六、九〇九	二九六、九〇九	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇
深川	二〇五、二二〇	二〇五、二二〇	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇
合計	二、四九九、二二七	一、五八一、二二九	七六七、三二六	一、六八五、三二四

(備考) 避難者数は市内に在る者の数にて近郊避難、歸郷の推定数は八一三、九〇三である

内外人の同情

九月一日の大地震大火災の爲めに、東京市が被つた損害の莫大なることは、今更ら言ふまでもないところだが、此の災害は従前のものと違つて、堂々たる大建築が、貧弱な家屋よりはより多く打壊崩落の運命に導かれてゐる。従つて東京でも横濱でも、富豪の強いられた損害は實際豫想の外に多額である。今日まで新聞紙の傳へたところでは、三菱や三井あたりの被害程度は、何れも數億に達してゐると言はれるのだ。此他大倉、安田、淺野以下の諸氏も、多大の損害を餘義なく

されて、其の回復には長年月を要すること疑ひのないところたるに拘はらず、一度大惨禍の事實が酷烈なるを知るに及んでは、自家の損害や打撃を顧る暇もなく、直ちに多額の義金を捐て、罹災百五十餘萬同胞の難に赴かれたのは、滿天下の周知するところである。而して此の大災害が世界各國に知れ渡るや、洋の東西を問はず、擧つて日本今次の不幸に同情し、義金を募るもの、物資を集むるもの、或は救護班を組織して我國に派遣するもの殆んど及ばざるを恐るゝ如き有様であるが上に、災害前までは排日排貨の氣分を以て滿された中華民國ですら、日本の帝都以下が不幸なる慘禍に見舞はれたと知るや、即日排日的のボイコットを中止して、暖かき同情を惜まぬ態度を執り、北京政府は總統令を發布して二百萬元の救護費支出を命令し、同時に全國の資本家に向つて日本災害慰問の義捐金募集を奨励し、排日氣分の最も旺盛であつた上海ですら即時に數萬元の救護費を募集した。嗚呼人情に古今東西なし、政策の爲めには時に相排斥の態度を執るの餘義なき事情ありとするも、豫期せざる災害が人類の幸福を打破する時は、人種の異同の如きは問題外に置かれ、四海兄弟の實が期せずして表現される。何といふ頼もしい次第であらう。茲に我々は此の頼もしき人心に深厚なる敬意を表すべく、謹んで諸君子の芳名を列記し、永く今日の記念を止めたいと思ふ。

よ。(紙面の都合上記名は一萬圓以上に止めて置く)

金額	芳名
一金五百萬圓	岩崎男爵家
一金五百萬圓	三井男爵家
一金三百萬圓	安田善次郎氏
一金二百五十萬圓	住友男爵家
一金百萬圓	大倉男爵家
一金百萬圓	淺野惣一郎氏
一金百萬圓	鈴木一子氏
一金三十萬圓	鍋島侯爵家
一金三十萬圓	島津公爵家
一金三十萬圓	毛利侯爵家
一金三十萬圓	前田侯爵家
一金十五萬圓	鴻池善右衛門氏
一金十萬圓	根津嘉一郎氏
一金七萬圓	徳川家達公氏
一金三萬圓	關孫文氏
一金一萬五千圓	有賀長文氏
一金一萬五千圓	福井菊三郎氏
一金一萬圓	天理教本部
一金一萬圓	東京日日新聞社
一金一萬圓	大阪日日新聞社
一金一萬圓	時事新報社
一金一萬圓	大坂新報社
一金一萬圓	七海兵吉氏
一金一萬圓	藤岡淨吉氏
一金一萬圓	池田成彬侯
一金一萬圓	菊本直次郎氏
一金一萬圓	武田秀雄氏
一金一萬圓	木村久壽彌太氏
一金一萬圓	龜島廣吉氏
一金一萬圓	今井利喜三郎氏

- 一金一萬圓 藤澤政四郎氏
- 一金一萬圓 安川雄之助氏
- 一金一萬圓 武村貞一郎氏
- 一金一萬圓 南條重雄氏
- 一金一萬圓 小林正直氏
- 一金一萬圓 平田篤次郎氏
- 一金一萬圓 田中文瀾氏
- 一金一萬圓 牧田三郎氏
- 一金一萬圓 岩田謙三郎氏
- 一金一百萬封度、一大豆一百萬封度、其他建築材料、被服、藥品等以上
- 第一回分
- 米 國赤十字社
- 米 華民國政府
- 上海實業團
- 張作霖氏
- 蘇州政界
- 一金二十萬圓
- 一金二十萬圓
- 一金六萬一千元
- 一米五十萬弗分、麥粉二萬俵
- 一金五萬封度、食料多數

右の外三菱合名會社では多量の米穀、三井合名會社では食料品多數等を寄附した外、三井の所有地本所、龜戸、澁谷、上野其他麻布今井町の三井男爵家構内に多數のパラックを建設して避難者を收容し、又三井慈惠病院では負傷者を收容して懇切なる看護を加えてゐる。

因に、上記録せる外一萬圓以上、一萬圓以下の寄附金は多數あるのであるが、事勿々の際なので茲に之を採録するのを得ないのを遺憾とする。

大正十二年九月二十八日印刷
大正十二年十月一日發行
定價金五拾錢

東關之大震災
不著者 村島亮
許發行 東京府北豐島郡日暮里町八二五 荻野孝廉
復發行 同 澁之川町西ヶ原三七一 關野眞吉
製發行所 東京府北豐島郡日暮里町八二五 交通運輸社
振替東京四五二四四

三英社印刷所

◎大震災と蓬萊生命◎

今回の大震災は實に前古未曾有の大慘事にして、帝都の大部分を灰燼に歸し死傷者幾萬なるを知らず、平素堅牢を誇りし倉庫も天變地異の前には何等の權威なく、有價證券の如きも多くは烏有に歸し、纔かに身を以て免れ得たるを幸福なりとしつゝある状態なりとす。

然るに我社は不幸類焼せしと雖も、會社の資産に屬する有價證券は豫て保護預けとせし事とて完全に保全せられ銀行預金等も亦異状なかりしのみならず、沈勇にして果敢なる職員に依りて重要書類の大部分は之を猛火の中より搬出せし爲め業務運行上些しも支障なかりしは寧ろ奇蹟と云ふべく契約者一同と共に慶賀に堪へざる次第にして災後直ちに假事務所に於て震災に依る保険金支拂及貸付金を初め一般事務を進捗しつゝあるは誠に異數にして本社の幸福とする所なり。

本社 東京市京橋區南傳馬町二丁目九番地
假事務所 東京市京橋區銀座ビルディング内

蓬萊生命保險相互會社

社長 太田清藏
專務取締役 武末祐三郎

一、創立 明治四十三年
一、總資産金 四百八拾六萬餘圓





終